
とある空想特撮科学シリーズ ウルトラマンマグナ

イマジンカイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある空想特撮科学シリーズ ウルトラマンマグナ

【Nコード】

N6068M

【作者名】

イマジンカイザー

【あらすじ】

M78星雲・光の国からやってきた新たなウルトラマン。異次元空間”ウルトラゾーン”に巻き込まれ、出てきた場所は…… 『学園都市』!? この小説は超電磁砲主要登場人物『佐天涙子』を主役に据えたオリキャラウルトラマンと超電磁砲コラボの二次創作作品です。

【！】はじめにお読みください【！】

佐天涙子「この小説は、”とある科学の超電磁砲”^{レールガン}のキャラクターと、

オリジナルのウルトラマンを組み込んで制作された二次創作です」

初春飾利「時系列はテレビ本編一話、よりもちよつとだけ前の話です。

でも話の都合上、TV本編と重なったり、

あえて無視する箇所もたくさん出てくるかと思います」

白井黒子「一部の話を除いて、

世界観も話ごとの繋がりもりセットされる”オムニバス形式”を用いていますから、

テキトーに斜め読みするも、真面目に話を追ってゆくのも良しですわ」

御坂美琴「あ。ちなみに文中の登場人物の名前は、ルビ表記で”カタカナ”になっていて違和感を覚えると思うけど、これは初期ウルトラマン作品で、主要登場人物の名前が、みんなカタカナだったことへのオマージュだから、気にしないか、とりあえず忘れてね」

佐天涙子「あと、作中では”「」”表記が『人の会話』、

”「」”表記が、『心の中での会話』や『テレパシーか何かの表現』になるから、

かぎかつこの形で混乱しないように気をつけてね。

さて。一通り説明も終わったし、どうぞ本編をお楽しみください」

第一話：落ちこぼれのウルトラマン（前書き）

地球を離れ、幾億光年、遠く輝く銀河の星々。
その中でも一際目立ち、尾を引いて輝く二つの赤い星。

逃げるようにスピードを上げる星と、それを追うもう一つの星。

待つんだマグナ！ 今ならまだ間に合う。『光の国』に戻るんだ！

やなこつた。帰ったってどうせ、俺を待ってるのは罵倒だけじゃねえか。ウルトラの兄弟に選ばれたからって調子に乗るんじゃないよ、メビウス！

違う！ 僕は 友達 として、君を……！

友達だって？ 嘘つくんならもつとマシな嘘にしろ。そう思ってるやつなんか、あの国にいるわけないだろうがよ。落ちこぼれの、この俺なんかを……もう放っておいてくれってんだよ。たくさんだ！

君がそう言う以上、問答はもう意味をなさないだろうね。分かったよマグナ。だったら僕は……力づくで、君を光の国に連れて帰ることにする！

ああ上等だ！ やれよ、やってみせろよ！！

『マグナ』と呼ばれた光の巨人はもはやこれまでと足を止め、自分を追ってきた光の巨人 『メビウス』を迎え撃つ。

彼の意を汲んだメビウスは、徒手空拳の構えを取ってじりじりと迫る。塵や星屑が飛び交う音のない宇宙空間で、二人の巨人が向か

い合った。

いや、待て、待つんだマグナ！ 後ろッ！

後ろ？ 俺の気を逸らそうってのか……

だが、そこまでだった。突如、マグナの背後に不可思議な空間の歪みが発生し、彼を呑みこんでしまったのだ。

メビウスは彼を助けようと手を伸ばすが、飲みこまれるスピードの方が速く、マグナは歪みの中へと消え去ってしまう。

マグナ、返事をしてくれ！ マグナッ！！

そんな……。なんで、なんでこんなところに現れたんだッ！

『ウルトラ・ゾーン』……。

なんだ！？ なんなんだ！？ なんなんだよこれはッ！？

『マグナ』は光に歪む空間の中で様々なものを目にした。バラバラに斬り刻まれた怪獣の姿、どこかの部位が欠損した宇宙人。周囲に轟き、さながら合掌のようになっていいる呻き声。

だがマグナを一番驚かせたのは彼も知らぬ間に、どこか別の世界へと飛ばされたことであつた。

い、いいいいっ！？

へ、えっ！？

第一話：落ちこぼれのウルトラマン

- ・ウルトラマンメビウス
- ・宇宙ハムスター ジャムジャル 登場

独自の研究により、超能力すら人工的に開発することができ、技術レベルで日本どころか世界の十数年先を行く、『学園都市』。東京東部に位置し、神奈川県・埼玉・山梨にまで跨る円形の都市の、とある区立の中学校の校門前から、この物語は始まる。

「佐天さん！」

「あ。もう終わったの？初春」

誰かを待って校門に寄りかかりロングヘアで、右こめかみに白梅の花の髪飾りをつけた少女を、ショートヘアで、カチューシャ代わりに頭についたド派手な花飾りが目を引く少女が呼び止める。

二人は友達同士のように、ロングヘアの少女は微笑みを返して口を開いた。

「はい。佐天さんより20分くらい前に。で、で？ 結果はどうだったんですか？」

「相も変わらず”レベル0”ですよーっと。ったくもう……」

花飾りの少女、初春飾利と、その友人、白梅の花の髪飾りの少女佐天涙子。彼女たちは学園の能力開発の一環として、能力レベルの計測テストを受けていた。

結果は初春が”1”で、佐天が”0”。初春は”日常に役立つ程度の能力”使いで、佐天は”超能力を持たない普通の人”という結果だ。

いつものことだと納得はしたが、それでもがっかりとうなだれる佐天。初春はそんな彼女を困った目で見つめ、優しく慰めた。

「まあまあ。わたしだってレベル”1”ですし」

「慰めになってないっての。ここに来る前は、自分にどんな能力があるんだろうつて、期待に胸いっぱいだったのになあ。あああ。あたしも欲しいなあ、なんかすごく、どでかい能力」

「そういうときは気分を変えましょうよ気分。しょげーっとしてる佐天さんなんて佐天さんらしくないですって。そういえば今日か明日の夜ぐらいに、この街の近くに流星が降るって噂が」

「気分……ねえ。そうだねー、じゃあ」

ええいつと。

ひゃ、ひゃあああつ！？

佐天は息を深く吸い込むと、目にも止まらぬ速さで初春の後ろを取り、彼女のスカートの端を掴んで、ぐぐいつと上に引つ張った。驚き、必死に抑えようとする初春だが、もはや後の祭り。彼女の半径5mほどの場所で歩いていた男子は、皆初春に釘付けと相成った。

「ふう〜ん。今日はフリルのついた”黄色”かあ」

「なっ、何をするんですか佐天さん！？」

「ほら、なんとというかその……気分転換？ 目の保養になりましたわあ」

「佐天さんはよくてもわたしはよくありません！」

「いいじゃないじゃん。スキンシップの一種だよスキンシップ」

「んもう……佐天さんはっ！」

いつものことだと理解しつつも、赤面しつつ怒りをあらわにする初春。しかしそれは彼女の携帯電話にかかってきた一通の着信によって掻き消された。

「ん？ どしたの初春」

「ああ、シャッジメント風紀委員の仲間から招集がかかったちゃいまして……ごめん

なさい佐天さん、わたしはこれで」

「ああ、うん。頑張つてねー」

『ジャッジメント
風紀委員』。

「9枚の契約書にサイン」「13種類の適正試験」「4か月に及ぶ研修」などの厳格で面倒な規約をパスしたもののだけが所属できる能力を持つ学生たちの学園都市の治安維持機関だ。

初春に電話をかけてきたのはその同輩で、彼女の力を早急に求めているのだと言う。

電話を切った初春は佐天に別れを告げてそそくさと走り去って行った。

校門前にひとり残された佐天涙子は、下校路を通りながら一人考える。

能力、かあ。

超能力者を育成する『学園都市』にしながら、あたしはいつまでたつても無能力者のまんま。

ここに、この場所にいる意味……、あるのかなあ。あたしに。本日は晴天なり。雲ひとつない青々とした素敵な天気。

でも、あたしにはこの天気が、目に映る何もかもが、灰色に見えてしょうがないよ。

ほんつと、つまんないや。

そんなことを考え、ぶつくさとつぶやいてた彼女がやってきたのは、いつものゲームセンターの、いつものパンチングマシンの前だった。

そんな迷いを振り切るためか、考えないようにするためか、佐天

はグローブに思いつきり力を込め、目の前の相手ボクサー目掛けて拳を振り抜いた。

「155kg。今週の最高記録更新……つと。でも、これだってゲームだしねえ」

記録を更新したはいいが、気分は晴れずに苦悩するだけ。空は澄んで青いのに、あたしの心はなんでこんなにも荒れ模様なんだろう。佐天は溜め息と一緒に気を吐いて、誰にも聞かれないほど小声でつぶやいた。

「はああ……あたし、死んじゃおっかな……」

怠惰に生きていくことに絶望し、物騒なことを口にする佐天。もちろんそれは、思春期特有の起伏の激しさと、親友に水をあけられた空しさから漏れ出た、ただの妄言だ。

が、そんな彼女の妄言は、意外な形で実現することとなる。

「……いや、ちょっと待つてよ。何よアレ。確かに今、死んじゃおっかななんて言ったけど、あれ冗談よ冗談！ ちょっとやめてよ！

こんな、星に押し潰されて死ぬなんて、そんな」

佐天涙子の意識は、そこで一旦途切れる。

ゲームセンターの入り口に直径5m程度のクレーターができたことも、自身の体に何が起きたのかも、どうなったのかをも知らぬままに。

なに？ ここ……

あたし、なんでこんなところにいるんだっけ？

なんだっただかなあ……。思い出せないや。

目を覚ました佐天が最初に見込んだのは、赤青黄緑の光が乱反射し、先行きの見えない不可思議な空間だった。

だが、そんな中でもひとときわ訳の分からないものが、彼女の目の前に堂々と立っていることに気づく。

で、あの怪しい『襖』^{フスマ}は何なの？ 何なわけ？

「ごめんください……、って誰もいるわけ、ないか」

佐天は襖の中に広がっていた四畳半の空間を見込む。中央に置かれた茶色いちゃぶ台とそれを囲むように置かれた薄紫色の座布団。わざわざ耐震処理まで施され、部屋の隅の、ぎっしりと本の詰まった本棚。

季節感の感じられない水色で、半透明のレース状のカーテン。その先にある、建てつけの悪そうな古臭い窓。

世界最先端の技術が集まる学園都市にはおおよそ相応しくない、古臭いアパートの一室のような部屋だった。見覚えなどあるはずもない。

だが、少なくとも中には人がいるらしい。茶色地に唐草の模様の入った長暖簾^{ノレン}の先からこぼこぼと、何かを注ぐ音が聞こえてきた。

古臭く、生活感溢れる音を聞き取った佐天は、思わず暖簾の先にいると思われる誰かに声をかける。

「あ。あの」

「ん。ああ、”目覚めた”か？ ちよつとそこで座って待ってて。今お茶淹れて、そつちに持ってくるから」

暖簾の先の声の主は、軽薄そうながらも良く通る声で佐天に座って待つように促した。彼女は訳が分からないながらも彼の言うことに従い、座布団の上に正座して腰掛ける。

が、座り慣れないやり方に彼女の脛はすぐさま悲鳴を上げ、佐天は一分も持たず正座を崩して足を伸ばした。

丁度その時だったろうか。彼女に座るよう命じた何者かが、暖簾口からその姿を現した。

「はいはいどうもね。改めまして、こんにちは」

「は……いい、いいツ!？」

佐天は眼を見開いて絶句した。そうせざるを得なかった。

彼女が目にしたものは、暖簾をまたいでやってきた”それ”は、”眼”に至る部分を除き、思わず目を背けたくなるほど金色に光り輝く、目算でもゆうに2mを超えるほどの大男だったからだ。

実像が見えない以上”男”、と呼称するのはおかしな話ではあるが、発した声から察するに、佐天は男の人なのだろうと認識することにした。

「何？ 何固まっちゃってんの。ま、ま。お茶でも飲んで」

光に包まれた”それ”は、飾り気のない茶色のお盆をちゃぶ台の上に置き、これまた飾り気のない灰色の湯飲みを佐天の前に差し出した。

湯気、色、摘みたて茶葉の芳ばしい匂い。目の前の存在がなんだから分からないが、差し出されたものは緑茶で間違いなさそうだ。

佐天はとりあえず差し出されたお茶を飲む。毒などは入っていないが、どこをどうやったのか、これとは別に飲み物が欲しくなるほど渋いお茶だった。

渋すぎる緑茶を一気に飲み干した佐天は、ちゃぶ台から身を乗り出して畳みかけるように問いかける。

「あ、あんた一体何者なの!？ 全身キラキラだし、畳み部屋で普通にお茶淹れてるし、そもそもあたしはなんでここにいるのよ？ 一体どういうことが説明してよ!」

「ま。まあ、待てよ。そんなに畳み掛けられちゃあ説明できん。ここは一つ、順序良く行こう。な」

「う、うん」

男はお茶を少し口にして一拍置いて口を開き、妙に気まじめな口調で話を始めた。

「時間が推しているので単刀直入に話す。お前は死んだ」

「は……あ?」

「信じていないようだな」

「だってそうでしょ。手も足もあるし、あなたの体もはっきり見えるし」

面倒だな。じゃあもつと分かりやすく説明してやる。

光の男はどこからともなくピンク色のリボンが巻かれた、無地の白い長方形の箱を取り出し、ちゃぶ台の上に置いた。

「なにコレ」

「開けるといい。君が今どういう状態なのか、すぐに分かる」

「ふう……ん」

男に促され、巻かれたリボンをといて箱を開ける。中でたぶたと水がたわむ音と感触がして、少々気持ちが悪かった。

しかし、そんなものは序の口に過ぎなかったと中身を見た瞬間佐天は思い知る。何故ならば。

「何コレ？ 豚の……角煮？ にしてはずいぶんおつきいけど……」

指まであるし、豚足か何か？」

「いんや。『腕』だよ腕。人間の。っていつか……、おまえの」

え、えええええっ！？

佐天は手に持った箱を放り投げ、男の向かいの壁まで後ずさりをした。

投げられた箱は美しい曲線を描きながら、”腕”と共に男の頭に直撃し、光り輝く彼の体表を赤く染めた。

「な、なんだよなんだよ！ そのまま見せたら卒倒すると思って、手間をかけてディフォルメをかけて、臭いもカットしてやったつてのに、何故そこで驚く！ おかしいだろ！」

「これをディフォルメだって言い張るあなたの神経が分かんないわよ！ どう見せられたつて驚くしかないでしょうが」

これはどうあつても佐天の言い分が正しい。周りにあるものを手当たり次第投げつけ、佐天は嫌悪感をあらわにするが、男は時間が推しているからと、それを無視して言葉を続けた。

「そう。お前は死んだ。というより、俺が殺した。とある星から逃げていた最中、得体の知れない空間に引き込まれ、気が付いたらこの星の、君の目の前にいたというわけだ。被害を出さないため、体のできる限り縮こめたが、君に接触することだけは避けられなかった。俺と衝突したことで君の体は四方八方に飛び散り、命の灯は消えた。だが、その瞬間に君の魂を俺の体の中に無理やり引き込んで、こうして話すことだけはできる、というわけだ」

「…………マジ？」

「大マジだとも。お前が若くして命を散らしたことは、どう考えても俺の責任だ。謝る。そこで、ひとつ提案があるんだ」

「提案って、何よ」

「なくなつたお前の命の代用品として、俺の”命”を与える。つまり…………俺と融合するんだ」

「はあ！？ な、何よそれ…………、人の命を奪つといて、それが代償だつての？ っていうか融合するとか、命を与えろとか、突飛過ぎて意味が分からないんですけど」

佐天は嫌そうな表情を浮かべ、口を大きく開いて言う。光に包まれた謎の男はそんなことなど意に介さず、話を続けた。

「ばらばらに飛び散つたお前のにくへ………… ああいや体と融合し、ひとりの人間として再びこの世界に顕現する。俺はこの星では実態のおぼつかない”光”でしかないが、お前の体を起点とすることで、一つの存在になることができるんだ」

「いや、その………… 待つてよ。意味が分からないって言うてるじゃん」

「ああ、ああ。お前が杞憂していることは分かる。だが安心しろ。俺と融合する以上、俺の精神はお前の体に宿ることになるが、よほどのことがない限り、体の主導権はお前に譲るよ、約束する。それに、いろいろと便利だぞ。最速マツハ2で空を飛び地を駆けて、厚い壁も突き抜ける鋼の拳に、弓のようにしなやかな足。その気にな

れば1kmぐらい楽々見渡せるウルトラ・アイに、500m先で落ちた一円玉の音をも聞き取れるウルトラ・イヤ―。他にも透視能力にテレパシー、読唇術なんかも」

自分の超能力自慢を続ける男に対し、佐天はちゃぶ台を両手で強く叩き、そうじゃないと男の言葉を遮った。ちゃぶ台の上に置かれた緑茶が衝撃でゆらゆらとたわむ。

「だあかあ、いきなり言われて”はい、そうですか”なんて言えるか!」

「いや、そう言われてもな。俺だって困るんだよ。お前さんの魂をここに繋ぎとめるのもそうなんだが、このまま不完全に融合していると、俺の体も持たないの。二人揃って無駄にお陀仏だ」

「そ、そりゃあ困る。困るけど……あたしにも心の準備ってものが」
「そんなの、なっってから困ればいいだろ。早くしてくれよ」

「……っっていうか、あれは何？」

「おっ、早速力を使い始めたか、感心感心。窓の先は外界と繋がっているんだ。どうだ、いい眺めだろう」

「いや、そうじゃなくて」と、佐天は窓の先に映る何かを指差した。

「なんだって……あ、あぁっ!」

「ええっと……、ここ、だよな」

「初春―。こっち、こっちですよ」

時を同じく、いやそれよりも少し前。初春はファミレスの『ジョナサン』へ来ていた。

右端の四人掛け禁煙席で、彼女と同じぐらいの背丈の少し赤みがかかった長い髪を両側で縛った所謂『ツインテール』の少女が、鈴の音のような涼やかな声色で初春を呼んでいた。

風紀委員としての仲間であり、レベル”4”の能力者、「白井黒子」だ。

「お待ちせしました白井さん」

「遅い……と言いたい所ですが、私も今来たばかりですし、許して差し上げます。それで、能力の方はどうでしたの？」

「相も変わらずレベル1のままです。えへへ」

「ま、変わらないならそれでもいいですが」

初春は申し訳なさそうに微笑んで座席に腰掛け、ウェイトレスにオレンジジュースを注文し、やや不機嫌そうな黒子に問いかけた。

「ところで、何かご用ですか？ 白井さん。電話じゃ急ぎの用としか言ってなかったですし」

「そう、そこですの初春。あなたに頼みたいことがあって」

「わたしに、ですか？」

「すごく重大なことですの！ 猫の手……あぁいや、この際初春の足でも、とにかくなんでも借りたい状況なんですの！ 協力してくださいまし！」

「わ、わか……分かりました！ 分かりましたから、落ち着いて話をッ！」

「あああ、私としたことが……。実は」

黒子が再び口を開こうとしたその瞬間、彼女たちの視覚と聴覚を釘付けにする事態が起こった。

突如、ボーリングの玉ほどの隕石が『轟音を立てて』ファミレスの近くに落ちて来たのだ。その音と衝撃を聞きつけ、あつという間に人だかりが形成されてゆく。

「あれは……、ニュースで言ってた流星、でしょうか」

「この学園都市に隕石が落ちてくるなんて……。初春、調査に向かいますわよ」

「えっ？ でも白井さん、わたしに何かして欲しかったんじゃ」

「学園都市の堅牢な防護システムを遮って降ってきた隕石ですよ」

？ 協力してほしいのは山々ですが、風紀委員としてこれを見過ぐすわけにはいきませんの」

「そうですね。行きましよう白井さん」

隕石が落下したのは交差点脇の洋品店だった。

まだ数分も経っていないというのに、降ってきた隕石を一目見ようと学生たちが集まり、その場所を中心とし、円状に人だかりが形成されている。

「風紀委員ですの。通してくださいまし」

「はいはい、風紀委員が通りまーす」

そんな中黒子と初春は、右腕の腕章を見せて風紀委員であることを伝え、人だかりの中に割って入り、落下した隕石の調査を始めた。隕石は特価のワンピースやバッグが並んだ棚をことごとく砕いており、鈍い青色の輝きを発し、焦げた鉄のような嫌な臭いと、灰色の煙を濛々と上げていた。

二人は持っていたハンカチで鼻と口を覆い特殊耐熱性の手袋をはめ、ゆっくりと隕石に近づいてゆく。

「あちゃー。お洋服がぼろぼろですー」

「不幸だとしか言いようがありませんわね。天災ですし、保証なんて誰もしてくれそうにありませんし」

黒子は隕石を持ち上げ、左右に振ってみる。

少女が容易に持ち上げられる程度の重さであることが逆に不可解だが、予想に反して隕石は何の反応アクションも起こさない。初春は首を傾げて黒子に問う。

「しかし、なんででしょうねこれ」

「学園都市のセキュリティを破って入ってきた隕石……。どんなすごいものかと思いましたが、どこにも仕掛けがありませんの。これは私たちの手におえるような代物ではありませんわ。学校や本部に話して、学者様に観てもらった方が早そうですね。初春。周りの野次馬を追っ払って、この店を封鎖しなさい」

「了解です。すぐに連絡を……」

黒子が初春に指示し、隕石を再び床に戻す。初春が携帯電話で風紀委員の本部に電話をかけようとしたその時。青色の隕石は亀裂と音を立てて崩れ始めたのだ。

二人が驚き、口をあんどぐりと開けて茫然とする中、隕石は粉々に砕け、その姿を白日の下に晒した。

じゃむ。じゃむじゃるじゃむじゃむ。

隕石の中からそれとほぼ同じぐらいの大きさで、赤色のつぶらな瞳に長く伸びた前歯。青と白のきめ細やかな毛並みの、月並みな言葉で例えるなら『ハムスター』のような動物が顔を出した。

年頃の女の子である初春は目をきらきらと輝かせ、床の上で小首を傾げる青色のハムスターを抱きかかえた。

「きゃーっ！ 白井さん、見てください見てください！ ハムスターですよハムスター！ ハム太郎ですよ！」

「一緒に見ているんだから分かりますの。ですが初春、それは”ハムスター”と言っているいいものですか？ あなたが抱っこして人抱えもあるそれを。そもそも、落下した隕石から出てきたそれを」

「だってもう……こんなにかわいいんですよ！ 熱くないし、臭いもしないし、可愛い声で鳴きますし。」

ああ〜っ、わたしこの子連れて帰りたいです」

「おやめなさい初春！ その動物は施設に持っていきます」

「いやです！ ハム太郎はわたしが責任を持って育てます」

動物を抱える初春とそれを引き剥がそうとする黒子。

得体が知れない以上、どこかの研究機関に持って行き、生体その他を調べてもらうのが得策なのだが、

初春はそれをよしとせず、手を放そうとしなかった。

だがその最中、黒子は誤ってハムスターの額についていた緑色に輝く『水晶』のようなものに触れて動物を床に落としてしまった。

「あぁッ、何をするんですか白井さん！ ごめんね、痛かった？」
ハム太郎

「名前を付けて愛着をアピールしたってダメなものはダメですよ。さあ、早くそれをおよこしなさい」

「いやです！ この子はわたしが……」

「ひゃ、ひゃああ……ああ。う、ういひやる……」

「どうしたんですか白井さん。そんな、蛇に睨まれた蛙みたいな顔して」

「う、う……うしろ……」

「うしろ……？」

風紀委員の二人は、その様子を見ていた野次馬は、いやその近辺にいた人々は皆、眼前の光景を前に、自分の目を疑った。

じゃーむじゃじゃむじゃるじゃるじゃるじゃむ！

人の並みいる白昼の街中で、二階建てほどのお店を、電柱を、道路沿いの歩道橋を、十階建てのマンションをも超える、巨大な生き物が姿を現したのだから。

腕は血走って膨れ上がり、50mの直線コースほどに伸びた長い尻尾。後に目撃者や風紀委員たちから『ジャムジャル』と呼ばれることになる、巨大な宇宙怪獣の登場である。

「な、何よあれ！ ハムスターが……でっかくなっちゃった！ っていうか、あれ本当にハムスター？ そういう風にしか見えないんだけど。いや、ちよつと待って！ あれって……」

その光景を見て驚いたのはこの世と隔絶された空間にいる佐天も同じだった。だが、ウルトラ・アイによって強化された視覚を持つ

佐天は、その上で、巨大生物の下にいる人間の姿をも見込む。

洋品店の瓦礫の近くで腰が抜け、震えている人物。友人の初春飾利その人だ。

「初春！？　なんでこんなところに！　いや、そんなこと言ってる場合じゃない！　ちよつとあんた！」

「な、なんだよ急に」

「あんたが言った条件、呑むわ！　だからあたしに力を貸しなさい！」

「お前……、まさかあの怪物とやりあおうっていつのか？　悪いこととは言わねえよ、やめとけて」

「友達が危ない目に遭ってるのよ！　やめられるわけないじゃない！　ああもう、あんたが力貸さないうんなら、あたしだけでも行つて」

「馬鹿ツ、そんなことできねえつての！　こら、窓から顔を出すな……」

「はなせ、はなせ、はなせーっ！　って、うをわああああ」

男と揉み合いになり、足を滑らせ『部屋』の中から落ちた佐天。

光が歪む不可思議な空間に飲みこまれた彼女は

「きゃ、きゃああああっ！！」

「初春、私に掴まりなさい！」

怪獣が二人を踏みつぶそうとしたその時、黒子は初春の肩を掴んで、自分と彼女を別の場所に『転移』させた。白井黒子の能力『空間転移』だ。

自分と一定の条件を満たした他人、そして自分が持つ物などを、瞬時に別の場所に転移させる能力である。

黒子はそれを利用して相手の体勢を無理やり崩したり、敵の上空

に転移してドロップキックを見舞うなどの戦術を用い、中学二年生という若さ、少女というハンデを払しょくし、風紀委員として日夜活動を続けているというわけだ。

「ふう、間一髪ですの」

「あ、ありがとうございます白井さん……」

「しかし、油断しましたわ。あんな化け物になるとは。もう私たちの手には負えませんわ。警備員アンチスキルに応援を……」

「そんなあ、始末しちゃうんですか？ あーんなに可愛いハム太郎を」

「そうする以外に道はありませんの。理解しなさい初春」

「でも……、でっかくなつたつてハム太郎はハム太郎なんですよ！？ ほらあ、あんなにくりくりした眼でかわいいのに……」

始末すると聞かない黒子に、それはダメだと嘆願する初春。しかし、そこで初春の予想し得なかつた事態が起こつた。

ジャムジャルがとある雑居ビルを横切ろうとした、その時。口を開き、長い前歯をちらりと見せた瞬間、背面から口元あたりまで生えた青色の毛とお腹の白い部分が、口元から『腹部まで』ぱっくりと開いたかと思うと、目にも止まらぬ速さで、雑居ビルを”一棟まるまる”飲みこんだのだ。

ジャムジャルの口元からこぼれ落ちるコンクリートが、その下の駐車場に雨のように降り注ぎ、停めてあつた車を粉々に砕いてゆく。もう、擁護しようがなかった。

「初春、あなたはあれを……護りたいというんですの？」

「ごめんなさい白井さん。無理です」

「結構」

「でも、でもでも白井さん。倒せるんですか？あんなでっかいのを……いくら警備員でも無理なんじゃ」

「それは」

その瞬間、二人の前にジャムジャルの指が迫る。黒子は即座に反

応じて、初春の肩を掴み再びテレポート。ジャムジヤルの背後の雑居ビルの屋上にワープした。

「ちょ、ちよっと！ 白井さん！」

「な……ッ！」

しかし、それがいけなかった。テレポートで雑居ビルにワープした瞬間、ジャムジヤルの尻尾が振り上がり、彼女たちへ振り下ろされていったのだ。

空間転移は万能の力ではない。一回の使用につき、1、2秒程度テレポートのラグが発生してしまうのだ。雑居ビルを潰してしまうほど大きな尻尾は既に彼女たちの目と鼻の先にあり、そこにラグがある以上、もうかわしようがない。

二人は『もはやこれまでか』とあきらめ、自分たちの運命を呪う。

させ、るかあああああつ！

だが彼女たちが命を落とすことはなかった。尻尾に潰されずに済んだのだ。それは何故か。何故なのか。

十三階建てのマンションを見下ろすほど大きな”光の巨人”が、雑居ビルとジャムジヤルの尻尾の間に割り込み、掴んだからだ。

金色の輝きに包まれた巨人は、尻尾を振り払って立ち上がる。体に纏いし光が消えてゆき、彼の実像が、姿が衆目に晒された。

「しら……白井さん、あれ……って」

「詳しくはありませんが……、先日偶然”最終回”を見てたので知ってますわ」

「あれ……ですよね？」

「あれ……ですわね」

初春と黒子、いや学園都市に住む人々が見たそれは、無表情で銀色の仮面のような質感の顔。ルビーのように美しく煌びやかに輝く赤き瞳。頭の先から背中にかけて伸びる赤い”とさか”のような突起。

全身を形作る銀色に、力強く伸びる赤色のライン。

腰から足先にかけて掛かり、色身の引き締めを担う青色。そして「白梅の葉」のような装飾に囲まれた、胸に輝く青色の発光体。

彼こそは遠い宇宙の果てから地球を守るためにやってきた正義の戦士、『先週まで』テレビ放送され、子どもたちの人気を一身に受けていた、特撮巨大ヒーロー『ウルトラマン』の姿だった。

「本当に……ホントにウルトラマンに……なっちゃったの？ なんかもう、何が起こっても信じられそうなんだけど」

この様子を見ていた人々は皆一様に口をあんぐりと開けて驚く。それは変身した佐天本人も同じであった。

佐天は自分の目から見える景色の変容と己の姿を見込み、銀色の仮面の中で驚愕に顔をひきつらせていた。

「ま、なったらなつたでやることはひとつ！ かかってきなさい青ネズミ！」

佐天は自身に起こつた変化をとりあえず横に置き、目の前に立つジャムジャルと向かい合った。何はともあれ、ウルトラマンとして怪獣を倒してしまおうと言うのだ。

しかし、その一方で彼女はある疑問に直面する。自分に力を与えた光の巨人。自分の心の中に同居する彼は、不安と恐怖に顔をひきつらせ、縮こまって震えているのだ。

気にはなるが、そんなことを気にしている時間はない。ウルトラマンは地上では『3分間』しか活動でないのだから。

でえええいいいやあああつ！

ウルトラマンとなつた佐天は、足元の雑居ビルや電線などを散らして接近し、ジャムジャルに組みついた。怪獣の足を止め、腹や頭にパンチにチョップの応酬。

特撮巨大ヒーロー定番のコンビネーション攻撃だ。

じゃむ！ じゃむじゃるじゃむじゃむ！

だが、どうしてなのか。ジャムジャルには傷ひとつつけられず、痛がる動作すら起こさない。

それどころか、いたずらに怪獣の怒りを買ったウルトラマンは、太く伸びた両腕で脇腹を掴まれ、ぎりぎり締め付けられてしまった。

たまらず、攻撃をやめて距離を取るウルトラマン。

「ぐう……うっ！ だったら、これでどうだ！」

ウルトラマンは距離を取った後、両足で地面を強く踏み込んでジャンプ。その勢いと自らの体重を武器に、怪獣にドロップキックを浴びせた。

が、これも然したる効果はなく、ジャムジャルの皮下脂肪に阻まれ、その弾力によつて弾き飛ばされたウルトラマンは、地上から700mほどの距離から弧を描いて墜落し、直径300m近い大きさの大型スーパールの大型駐車場に叩きつけられた。

「いてっ……ててて……。ああもう！ あんた、ちょっとあんた！」

「な、なんだよ……」

「何だよも何もない！ あんた、ウルトラマンなんでしょ！？ あたしに任せっきりにしないで、手伝ってよ！」

このままでは埒が明かかないと、佐天は深層意識の中に潜む、先ほどのあの男に、心の中で文字通り詰め寄った。

「む、無茶言うなよ。それに出たってのはお前だろ」

「でもなんとかしないと、あんたも死ぬのよ！？ 一心同体なんでしょ！」

「それは……そうだが……。でもさ、俺が手を貸そうが貸すまいが」彼は何故、ここまで怪獣に怯える必要があるのか。ウルトラマンとは、怪獣に恐れられる存在ではないのか。

佐天は彼の行動と言動に不信感を覚えたが、そんなことを気にしている時間はない。

「ああもう！ いい、あたし一人でやるから！」

「ひとりでやるってお前、何をする気だ」

「決まってるでしょ！ アレよアレ！」

佐天はウルトラマンのことを、巨大特撮ヒーローのことを詳しく知らない。が、それでも彼の存在ともう一つ、彼の代表的な『必殺技』のことは、それらを知らずとも、子どもたちならなんとなく分かっているものだ。

佐天は意識を集中させて両の腕を十字に組んだ。彼女の、ウルトラマンの両腕にエネルギーが満ち満ちてゆく。

エネルギーの充実と緊張が最大限に高まった瞬間、佐天は両腕に溜まったエネルギーを光線としてジャムジャルに照射した。

ウルトラマンであれば誰もが持つかの必殺技、『スペシウム光線』だ。

いつ、けえええええええつ！！

十字に組んだ両腕から青色に輝く光線が放たれ、ジャムジャルに向かう。それを見守る誰もが、ウルトラマンの勝ちを確信した。

じゃむ？

「……は？」

「えっ？」

「なんですの？ あれは……」

が、それと同時に彼らが全く予想し得ない事態が起こった。

ウルトラマンが放った光線は、ジャムジャルに届くことなく、10m程度の距離まで伸びたところで急に勢いをなくして垂れ下がり、

真下の歩道橋を派手に嘖き飛ばしたのだ。

佐天は何かの間違いだと思い、何度も同じことを試みるも、結果は同じで、周りのものが無駄に壊れ行くだけ。

ウルトラマンのくせに光線技がまともに撃てないウルトラマン。

彼らの戦いを固唾を吞んで見守っていた人々は、それによる被害の拡大と眼前の怪獣の恐怖をも忘れ、ただただ眼を見開き、口を大きく開いて呆けていた。

しかし当の本人は呆けているわけにはいかない。自身が二次災害を起こしたことはとりあえず横に置き、佐天は今一度深層意識の中の男に詰め寄った。

「何これ！ 何よ、何なのよ！ あんたダメじゃん、全然ダメ！ ウルトラマンでしょ？ あんたウルトラマンなんじゃないの？ なんで光線技がまともに使えないわけ！？」

ものすごい剣幕で、彼の襟にあたる部分を掴み、ぶんぶんと上下に振る佐天。しかし男はそのことに対して何も答えず、暗い顔でうつむくばかりだ。

「そう、だんまり決め込もうってわけ。そうはいかないわよ。あたしはね、あなたに命取られてるのよ？ あなたの不注意で！ 理不尽に！ だからあたしには知る権利がある。あなたが一体何で、なんでこうなったか！ 説明しなさい！ なんでなのよ！」

「分かった……、答える、答えるよ。俺はウルトラマン。確かにウルトラマンだ。だがな、俺はよ、”落ちこぼれ”、なんだよ。その中で、さ」

「おち……こぼれ？」

「ああそうさ。光線技がまともに撃てないばかりか、力も飛ぶ力も走る力も弱い。怪獣とやって勝ったことがない。落ちこぼれなんだよ、どうしようもなく。警備隊の仲間迷惑かけてばかりで、そのせいで陰口叩かれて、いくら努力しても努力しても、ずっとずっ

と人並み以下だ。だから逃げた。あの星から、M78星雲から。怪獣のいないどこか遠い星で、一人で暮らそうと思ってたんだ。そしてたら異次元空間に巻き込まれて、この星に来ちゃった。平和そうだったし、お前の姿を借りれば生活には困らないと思ってたが、結局またこうして怪獣とやり合うハメになっちゃった。もう最悪だったんだよ」

意気消沈し、絞り出すようにして語られる彼の言葉に、佐天は共感を覚えた。

周りにいるのは超能力者ばかりなのに、当の自分は無能力者。ひとりで勝手に壁作って、なぜかどこか寂しくて。本当は分かった。自分に能力なんて芽生えっこないって。羨ましいと思っても、どうにもならない歯がゆさにも気付いてた。

だが、だからこそ、佐天は彼に厳しい口調と大きな声でまくしたてる。

「あんたは、あんたはそれでいいの？ いいつて言うつもりなの？ そんなの、あたしが許さない！ 許してなんかやらないんだから！ あんたがあんたの星でどう言われてようが、そんなの関係ない。あたしにはないすごい能力を持つてるくせに、それを生かせずに終わるなんて認めない。絶対に認めないんだから！」

「だが……どうしろというんだ！ あいつには勝てない！」
「んなこと分かってる。だったら……きやつ！」

そこで一度二人の会話は途切れる。ジャムジャルが体を丸めて飛び上がり、肩膝を立ててしゃがむウルトラマン目掛け、ボディプレスを仕掛けたからだ。

たまらず体勢を崩し、車道や歩道を巻き込んでうつ伏せになるウ

ルトラマン。それを尻目に彼の背中を狙って飛び跳ねたり、ごりごりと自分の体を押しつけるジャムジャル。

これには、彼の命の源『カラータイマー』もたまらない。青色に輝いていたカラータイマーは、ウルトラマンの疲労と呼応し、壊れたブザーのようなけたたましい音を鳴らしながら点滅を始めた。

出現してからまだ、2分程度しか経っていないのに。

「あれ、なんで？ ウルトラマンって確か、3分間は活動できるんじゃない」

「落ちこぼれで体力もねえから、2分半が限界なんだよ、悪かったな！」

「そんなセツシヨウな……」

情けない話だが、彼を責めても嘆いてばかりもいられない。どうにかしなければ自分たちの命が危ういのだ。

佐天はジャムジャルの攻撃を受けつつ、何か良い手はないかと思案を巡らせる。

ふと、彼女の頭の中にゲームセンターで行っていたゲームのことが浮かぶ。小憎らしいボクサーを眼前に捉え、強打を打ちこむあのゲームだ。

佐天は何を閃いたのか、ジャムジャルが再び体ごと踏みつけようと飛び上がった瞬間を見計らい、体勢を仰向けにして今一度両の手を十字に組む。

それは無駄な行為だと、男は深層意識の中から彼女に呼びかけた。

「また光線を撃とうつてののか？ 俺には光線は飛ばせないんだぞ！」

「分かっているよそんなこと。できないんじゃないし、付け焼刃でできるとも思えない。だったら」

これで、どうだっ！

再び両の腕にエネルギーが満ち満ち、充実してゆく。ここまでは

先ほどまでと同じだ。

だが佐天は、エネルギーの充実と緊張が最大限に高まった瞬間、その力を両腕に溜め込んで抑え込んだのだ。

光線のエネルギーは凝縮され、ウルトラマンの両手に、六角形をした青色のリングのようなものとなって付与された。

「よしッ、これならやれる！」

じゃむ？

ジャムジアルはその異変に気付いたが、重力の力には逆らえない。勢いをつけて落下してゆくジャムジアルの顔を目掛け、ウルトラマンは右手に輝く青色の拳を派手にスイングさせ、抉る^{えく}ようにして叩き込んだ。

じゃ……むむむむっ！！

瞬間、凝縮されたエネルギーは弾け飛ぶようにして解放され、ジャムジアルは寝転がるウルトラマンのすぐ隣に叩きつけられた。周囲の家屋や車が派手に吹き飛び、半径20mほどにクレーターが出来あがる。

「もおおおおおっ、いつばああああああっ！！」

ウルトラマンは止まらない。横たわるジャムジアルの頬目掛け、左手の拳を叩きつける。

もはやクレーターどころでは済まされない。ジャムジアルは土砂と家屋や電柱や車を巻き上げ、地中10m程度の深さまで埋められてしまった。

スペシウム光線のエネルギーが凝縮された一撃だ。いくら遠くに飛ばせなくとも、当たりさえすれば致命傷は免れない。

ジャムジアルは弱々しく断末魔の叫び声を上げると、地中に埋まったまま泡を吹いて事切れた。

街は、彼らが戦った直径1km程度の被害は甚大だったものの、

自称史上最悪のこのウルトラマンは、見事地球での初陣を制したのだった。

「やつ……た……」

「マジ……かよ、本当に、勝ちやがった……俺が、俺が？ す、すげえ！ 勝った、勝っちまったよ俺！ 170戦目にして、ついに！」

「170戦目！？ ってことはあんた、169回も負けてた……の……」

戦いを制し、高揚感に包まれつつあった佐天の意識はここで途切れる。

ウルトラマンとして活動できる時間の限界が来てしまったのだ。ウルトラマンはカラータイマーの信号音を周囲に響かせながら、再び光となって、街の風の中に消えていった。

初春、あそこに誰か倒れていますわ。

本当……って、あれは！ 佐天さん！？

あなたのお友達でしたの。御安心なさい、救急車は既に呼んでありますわ。

佐天さん、佐天さん！ 佐天さんッ！！

「う……いは……る……？」

佐天涙子が次に目覚めたのは、見知らぬ白い天井の部屋だった。

あの後廃墟と化した街の中で初春と黒子に拾われた佐天は、黒子の口添えで病院の一室に収容されていたのだ。

彼女が寝ている間に必要な検査は済まされており、擦り傷や切り傷はいくつかあったものの、命に別状はないとのこと。

「ああ、よかった、よかったです〜」
「んもっ、初春。そんなにくつつかなくても大丈夫だってば」

未だに信じられないな。

街のこの惨状を見ても、地面にめり込むハムスターの姿を見ても。

本当はあんなの、いなかったんじゃないのかな。
ウルトラマンなんてのも、怪獣なんてのも。
夢……なんじゃない、かな。

「あ。そうだ佐天さん。お着替えの時に制服から出てきたんですけど、これは一体何なんです？」

「これ、って？」

そう言いかけ、佐天は我に帰る。

そうだ。今日の授業の時、初春にボールペンを借りてたっけ。
クリーム色で、花柄のついたかわいいやつ。

「これも何も、ペンでしょペン。ボールペン。貸してくれてありがとうね初春」

だが、それを聞いた初春の表情は渋い。まるで「あなたは何を言っているんですか」とでも言いたげな顔だ。

「あのう……、これ、わたしのじゃないと思いますよ。ほら」

「おかしいなあ。スカートにはボールペンしか入ってないはずだけだ」

佐天はベッドの上から上半身だけを起こし、初春の手に握られていたペンを見込んだ。

なるほど、確かにこれは初春から借りたものではない。

ペンと言うよりは「ライト」に近い形状に、キャップ部にはめこまれた小綺麗な青色の宝石。それより何より、ペン先を出すための取っ手がついていない。

この不可思議な道具が、自身を超常の存在に変質させるものだ、
佐天涙子が気付くのは、まだまだ先のお話

第一話・落ちこぼれのウルトラマン（後書き）

次回予告

正義のヒーロー、『ウルトラマン』に変身する力を得た少女・佐天涙子。

危なげながらも宇宙怪獣を下し、その存在感を学園都市中に熱烈アピール。

そんな彼女の前に舞い込んできた新たな事件。学園都市トップクラスの『レベル5』能力者、『電撃使い』エレクトロマスターの御坂美琴ミサカ ミコトが行方不明になったというのだ。

彼女を溺愛する少女・白井黒子に促され、なし崩し的に事件に巻き込まれた佐天だったが、捜査線上には謎の宇宙人の影が。

人に幻惑を見せる『レノム星人』に対し、我らがウルトラマンマグナは、佐天涙子はどう立ち向かうのか？

次回ウルトラマンマグナ、『御坂美琴ゆうかい事件』。

来週も、みんなで読もう！

第二話：御坂美琴ゆうかい事件（前書き）

無能力者・「佐天涙子」は、
史上最弱のM78星雲人との不慮の事故で命を失う代わりに、
超人「ウルトラマンマグナ」へと変身する力を得、
彼と同化して一心同体の存在となった。
佐天涙子の未来に待つものは闇か、光か

第二話：御坂美琴ゆうかい事件

・幻惑輝怪人 レノム星人 登場

「ワイハル初春、ここにいましたの」

「あつ、シライ白井さん」

佐天涙子が入院している病室に、やや赤みかかった長髪をリボンで両側方に縛った少女が入室してきた。

学園都市の学生治安維持機関「ジャッジメント風紀委員」の一員であり、初春の同僚である『シライクロコ白井黒子』だ。

「あのハムスターの化け物が起こした騒ぎの後始末、それに事情聴取。何もかもまだ手つかずですよ？ それらをほっぽり出してしまうのはどうかと思いますの」

「すみません白井さん……でも」

「ま。そちらの方もご無事のようにですし、良しとしましょう。それで？ その方は」

黒子の問いに、初春はそのことに今更気付いたかのようにうろたえ、佇まいを直して答えた。

「ああつ、ご紹介が遅れましたね。白井さん、この人が『佐天涙子』さん。わたしのクラスメイトです」

同時に初春は佐天の方に向き直り、黒子に右手を伸べて答える。

「それで、この方が『白井黒子』さん。”風紀委員”のレベル4能力者で、一緒に風紀委員のお仕事をさせていただいています」

「あらまあ、初春のお友達でしたの。それはまた御無礼を。佐天さん……でしたか。私、白井黒子と申しますの。どうぞ、お見知りおきを」

「えっ、ええつと……佐天、涙子です。よろしく願います」

自分はただの無能力者で、相手は泣く子も黙る風紀委員長様。地位はどの程度のものなのか窺い知れないが、偉そうな雰囲気は話し方や態度に十二分に出ている。

佐天からすれば一番嫌いなタイプの人間だったのだが、そんなことなど気にも留めない黒子のあまりにもかしこまった挨拶に、彼女はただただ戸惑い生返事を返す他なかった。

「さて、挨拶も済んだことですし……初春、先ほどの話の続きですの」

「先ほどの、っていうと、レストランの中での一件、ですか？」

黒子は何も言わず首を縦に振り、鼻を赤くし目に涙を一杯に溜めて顔を上げ、初春の両肩を掴んで左右に激しく振った。

「『お姉様』が……お姉様が！ 昨日の夜から！ 行方不明……そう、行方不明なんですの！ 携帯電話も繋がらず、私に何も告げずに！ これは一大事ですわ！ 初春、すぐさまこの街一帯のネットワークにアクセスし、網を張りなさい。なんとしても！ お姉様を見つけ出しなさい」

右拳をぎりぎり握り締め、目を血走らせて初春に迫る黒子。当の本人は落ち着いて下さいと手で御し、顔に穏やかな笑みを浮かべた。

「そもそもなんでわたしなんですか？ 人探しだったらわたしなんかよりも固法先輩コノリや警備員アンチスキルの人たちに頼めば……」

それを聞いた黒子は初春の言葉を遮り、握り拳を作って壁を叩き、全くもって分かってないと声を荒げる。

「私があなたたちと同じ、レベルの低い学校に通っていたのなら、それもまた一手だったでしょう。ですが！ 私が通うのは規則の厳しい名門お嬢様中学校の『常盤台トキわだい』！ しかも！ 行方をくらましたのは常盤台のエース、『御坂美琴ミサカミコト』お姉様ですよ！？ 安易に誰かに頼んで噂にでもなってみなさい、お姉様の品位が！ 立場がッ」

「ああもうツ、分かりました、分かりましたよ……って！白井さんの寮の同居の方、あの御坂美琴さんだったんですかあ!？」
そうして黒子に振り回される初春を、残された佐天は不愉快そうな表情で見つめる。

白井黒子さん、ね。

レベル4の能力者様で、それでいて生まれや育ちをひけらかすと来たか。

あたしの一番嫌いなタイプだ。やんなっちゃうね。

無能力者である佐天は、偉そうでしかも能力をひけらかすタイプの人間を一方的に嫌っている。

自分には何もないという劣等感からくるものだが、それでなくとも黒子の態度や言動にはイライラさせられる。佐天は彼女たちから見えない角度で、頬を風船のように膨らませた。

「なんだなんだ。いつちよ前に”じえらしい”でも感じてやがんのか？ 感じるだけ無駄だと思うぜ。お前も俺も、落ちこぼれさんなんだからよ」

「そういうんじゃないよ。ただ、そーゆー人とはちよっとお近づきになりたくないってだけでさ」

「佐天さん、誰と話をしているんですか？」

「誰……って、ええっ!？」

そこまで話して、トンデモない違和感に気付く佐天。

今自分に語りかけてきたのは初春でも黒子とかいういけ好かない少女でもない、張りのある若い男の声だ。

佐天涙子はこの声の主が誰であるか、どこから声をかけているか知っている。そして同時に理解する。今日の昼時に起きた一連の出来事は、全て現実だったということに。

しかし、そのことを”声の主”に問い直すよりも前に、佐天の”

体”はベッドから跳ね起き、窓の棧に左手と右足をかけていた。

「ちよ、ちよつと佐天さん、どこに行くんですか!？」

「そんなもの、”俺”が知るか! いいか、”俺”を追うな! 絶対に追ってくるんじゃないぞ。じゃあな」

初春の制止も聞かず、服も着替えないうままに、訳も分からず引戸を抜けて走り去って行く佐天。

あまりのことに口をぽかんと開けて呆ける初春に対し、黒子は怪訝そうな顔に穏やかならぬ口調で彼女に問うた。

「初春。あの佐天さんという方は……、『日系』もしくは『ハーフ』の方、ですか?」

「は、はあふう? いえっ、そんなことはない、と思います」

黒子が発した、初春が予め想定していたものと全く異なる問いかけに、彼女は気の抜けた煮え切らない口調で答える。

自分が思った通りの回答が得られなかった黒子は、顎先に指を乗せて思案を巡らせた。

「ど、どうしてそんなことを聞くんです白井さん」

「横から見ているだけだったあなたは知らなかったでしょうが、あの佐天さんという方、『青い瞳』をしてらしたんですのよ? ただの日本人では考えられませんわ」

「ええっ、でも、そんな話聞いたことありませんよ」

「初春、あの方を追跡しなさい、今すぐに。病院の寝間着を召しているのですから、探し出すのは容易でしょう」

「見つけ出して……どうしようというんですか!」

「そんなこと決まっています。尋問 以外の何があると言いますの?」

黒子は右肩に掛かった髪をさつと撫でると、鋭利な刃物で空を切るような音を残してその場から消え去った。

地に落ちかけた太陽が、建ち並ぶビル群を美しい朱に染める日の入時。

佐天涙子は裸足で街中をただ闇雲に駆けていた。いや、より正確に言うならば彼女が、ではない。

佐天に宿る ウルトラマン が彼女の体を動かしているのだ。止まれ止まれと脳から指令を伝えるも、彼女の体はまるで興奮しきった牡牛のような勢いを成し、止まる様子を微塵も見せない。

ほとほと困り果てた佐天は、自分の意識を心の深部へと潜らせる。ウルトラマンと出会った、あの不可思議な和室の中へと。

「ちよつとちよつと！ 止まりなさい！ 止まれって言ってるでしょー！」

「げえッ！ お前、どうしてここにっ!？」

煤けた茶色のちゃぶ台が置かれ、まだ青々しい畳部屋に彼はいた。光輝く不確かな存在だったあの時とは違い、今のマグナは銀色の体に赤と青のラインが力強く伸びた姿をしている。

ウルトラマンは佐天がこの空間に入り込んだことに驚きを隠せず動揺しているが、佐天はそんなこと知るものかと彼に詰め寄ってまくしし立てた。

「あんた、なんてことしてくれるのよ！ 初春はおるか、あの白井さんって人にまで変人扱いされちゃったじゃない！ っていうか、あたしの体のままあんたの人格が出せるなんて聞いてないッ！」

「お前は一度死んだ。それを俺が合体することでどうにかこうにか命を繋いでいる。お前と同じことが俺にできない道理があるか？」

「それは分かったけど……さっきのは明らかにルール違反でしょ？ あたしの生活には干渉しない、主人格はあたしにあるんじゃないかなっただの!？」

彼女の体に宿ったもう一つの人格・ウルトラマンマグナは佐天に対しこう言った。「あくまで体の主導権は君のもの」であると。

しかし今はどうだ。佐天の体は彼女自身には抑えが効かず、お魚

を加えたどら猫を追う専業主婦のように、ただひたすらに裸足で街の中を駆けている。これは明らかにルール違反だ。

彼女の問いに、マグナは苦虫を噛み潰したような顔で答える。

「約束を破っちまったのは謝るよ。だが、それどころじゃねえんだ。来るんだよ”異星人”が！ そんなやつ相手なんかしてられるか。俺は逃げる」

「逃げるって……、なんでそんなものが来たって分かるのよ」

「敵は姿を隠して標的を襲うタイプだ。人間の目じゃあ見えないが、俺たちにはよく見えるんだよ。俺みたいなのが戦ったところで勝ち目なんかねえ。だから逃げた。どうだ、これで文句ないだろう」

「切羽詰まった状況なのは分かった。分かったけどさあ」

それが、ウルトラマンのすることかっつてのツ！

佐天涙子はウルトラマンマグナの逃げ越しな態度に怒りを覚え、

彼の鳩尾（と思しき部分）に右ストレートを叩き込んだ。

マグナは佐天の唐突な一撃にうろたえるが、彼女はそんなことなどお構いなしに、彼を押し倒して涙ながらに言葉を紡ぐ。

「何しやがんだッ、この野郎ッ」

「自分が弱くてどうにかなっちゃいそうで不安だつても分かる。どうしようもなく恐くて逃げ出したくなる気持ちも分かる。それに、あたしは光の国ってのがどんなところで、あんたがどれほど落ちこぼれなのかは知らないよ。けど！ あんたは、あんたはそれでいいの！？ 負け犬なんだよ？ 男ならカツコよく戦って潔く散りなさいよ、この弱虫」

「お前なア！ 相手がどんな奴だか知ってて言ってるのか？ ホントに死ぬぞ！ 死ぬんだぞ」

「知らないわよ！ それに、だから何！？ ヒーローが敵を選んで戦う！？ 自分より強いやつとケンカできないんなら、ウルトラマンなんて最初から名乗るなっ！」

「いけしゃあしゃあと……いきがるのもいい加減にしやがれってん

だ！俺はウルトラマンだが、落ちこぼれなんだぞ落ちこぼれ！
怪獣退治の専門家じゃねえんだよ！」

佐天の言葉に反応し、声を荒げて反論するウルトラマン。二人の拳と言葉をぶつけ合う議論が、佐天の心の奥底で静かに熱く燃え上がってゆく。

それゆえに二人は、『テレポルト空間転移』によって先回りした黒子が目の前に現れたことに気付けなかった。

「あのー、もしもしー？ 聞いてますのー」

「えええつ！？ いつ、一体いつから！」

「少し前からずっと呼んでいましたの。まあ、それはそれとして。あなた、お姉様のことについて何か知っているのでしょうか？ 私に洗いざらいお話なさい。でないと、痛い目を見ることになりますわよ？」

「ちょ、ちよつと待ってよ白井……さん。あたしは別に何も」

「嘘はあなたのためになりませんのよ。口で言っても分からないのなら、その身体にお聞きしましょうか？」

黒子は佐天の回答を待たずして行動に移った。彼女の肩に手を触れて地面にうつ伏せになるよう 転移 させると、同時に制服のスカートを翻らせ股のホルスターから細長い鉄針を数本抜き出し、それを佐天の病人服の至るところに刺し込んで動きを封じた。全て、彼女の持つ能力の応用である。

「これで逃げられなくなりましたわね。話す気になりました？」

「だあかあらあ、あたしは何も知らないんだって！」

二人の言っていることは食い違っているが間違いではない。

ウルトラマンが独断でやったことを佐天が知るはずがなく、佐天がウルトラマンであることを初対面の黒子が知るわけがない。両者の言い分は正しいが、認識の違いで根本的に噛み合わないのだ。

馬乗りになって佐天を問い詰める黒子もその剥離を薄々感じており、どういふことなのかと内心困惑していた。

これ以上問い詰めても無駄かと思い、鉄針を抜いて佐天を解放し

ようと手を伸ばす黒子だったが、その瞬間、佐天の瞳は真つ青に染まり、自分の力で鉄針を引き抜いて投げ捨て、黒子の胸ぐらを掴んで彼女の体を持ち上げた。

「馬鹿野郎！　なんで追つてきやがった！　せつかく逃げ仰せたと思っていたのに！」

「は、はあ？　何を仰いますの佐天さん！」

自分と同じ歳で、かつ能力者でもない少女に、鉄針を抜かれて持ち上げられてしまう。

こうなると困惑するのは黒子の方だ。慌てて何故だと問いかける黒子に対し、青い目の佐天はそれに一切応じず自分の話を続けた。

「てめえはレノム星人に追われてたんだよ！　あいつらは目撃者を絶対に逃がさない。光を自在に歪めて姿を消し、発光催眠暗示をかけて人間を捕獲して喰い者にする狂犬だ！　目を付けられたら絶対に逃げられないんだよ！」

「おっしやられていることの意味が分かりませんの！　それよりもこの手、この手を離さない！　く、くく、くるぢい……」

「ああ離してやるとも、だからもう俺には近づくな！　この”星”で静かに暮らすと決めたんだからな！」

「それとこれとは話が別ですよ！　あなたは失踪したお姉様のことを知っているはず！　それを聞き出すまでわあ……！」

離してやるからもう追うなと言うウルトラマンと、美琴の情報を得るまでは逃がさないと決して譲らない黒子。

二人のそれは、妥協点の見付からない不毛な争いへと発展してしまふ。

ところがその争いは唐突に終了することとなる。何故なら、ウルトラマンは黒子の瞳に、水晶の塊のような顔をした『何か』を見込んで怯え始めたからだ。

周りの風景に溶け込み、輪郭のみが揺らめいて見えるその姿。これがウルトラマンの言う　レノム星人　の姿なのだろう。

見つけた。目撃者。見つけた。捕獲。拘束。捕獲。

「畜生、もう来やがった！ ああもう……ああもうッ！」

「きゃあ！ いきなり何をなさいますの！」

マグナは星人の気配を見込み、黒子の胸ぐらを掴んだまま首だけ振り向く。

星人は左手をこちらに向けてじりじりと迫って来ていた。彼がいる場所だけ微妙に視界が揺らぎ、夕暮れ時の街角と相まって非常に不気味に見える。

その口振りと手付きから、目撃者である黒子を捕らえようとしているのは明らかだ。

レノム星人の手に集まる光が徐々にその輝きを増している。このままでは黒子が危ない。

見かねたウルトラマンはちっと短く舌打ちをして、両腕に力を込めた。

「ちきしょお！ どおにでも、なりやがれえ！」

レノム星人の光線が放たれるよりも早く、黒子の体を壁際に放り、彼女を庇って代わりにその光線を浴びた。

虹色の鮮やかな光に包まれたウルトラマンは徐々に色味をなくし、あつと言つ間にその場から消え失せてしまった。

「さ、佐天さん！？ 今のは一体……」

ウルトラマンほど感覚の鋭くない黒子には、何故彼に投げつけられたのかは分からない。

だが目の前で人が一人消え、目の前の空間が不気味に歪んでいる。常日頃多種多様な能力者の取り締まりを行っている黒子が、それを見て不審に思わないはずがない。

「私も消そうというつもりですか？ 上等ですわ、かかってらっしゃい、化け物！」

黒子は直ぐ様体勢を立て直して太股の鉄針を引き抜いて構え、気を張って周囲を見回す。

程無くして彼女の背後が妖しく輝き、一筋の光線が放たれる。光線の発射角から相手の位置を読み取ることはできたが、飛び退いてかわしては間に合わない。

「そこにいますのね。だったら！」

だがそれは普通の人間ならば、の話だ。黒子は空間転移で星人の背後（と思しき場所）に回り込み、手に持った鉄針を左脇腹に打ち込んだ。

レノム星人は脇腹から青い血を噴き、狂った豚のような荒く不気味な悲鳴を上げると、姿を完全に消してその場から逃げ去った。

「気配が消えた……まんまと逃げさせた、など思っているのでしょうか。だったら……」

黒子はスカートのポケットの中から携帯電話を取り出して、短縮ボタンで初春を呼び出した。

「あつ、白井さん。佐天さんは……」

「透明でスケスケの怪物によってどこかへ連れ去られましたの」

「なんかすごく卑猥なヒビキですね……、って！ そそ、それってどういう」

「放っておきなさい。それよりも、その透明な怪物に発信器付きの鉄針を刺しておきましたの。初春、すぐ反応を探知なさい」

初春は佐天のいなくなった病室にノートパソコンを持ち込んで学園都市の全体図に目を走らせていた。

自身の親友の安否が そんなこと 扱いされたことにやや憤慨するものの、同時に素早くキーボードを叩いて、学園都市の全体図から黒子が打ち込んだと思しき発信器の反応の様子を画面上に呼び出した。

「出ました。そこから南西五キロ、大きな倉庫の中で、不気味なくらいちかちか点滅してます」

「やはりこの近くに……。助かりました初春。後は私がかんたかしますの」

「ちょっと待ってください白井さん！ 援軍を呼ばなくていいんで

すか!？」

黒子は初春の言葉を最後まで聞くことなく電話を切り、鋭利な刃物で勢い良く空を切る音を残し、街角から消え失せた。

困った。実に困った。目撃者に逃げられた。目撃者。

動力源 になる人間が見つかった。動力源。私たちがここに
いる必要はもはやない。動力源。

目撃者を捕まえてそいつらを全部 餌 にしてこの星を脱出する。この星。

「ここは……どこ? あいつらは……何?」

佐天涙子が再び目覚めた先は、赤青緑紫のサイケデリックな明かりが周囲を包む、いやに奥行きのある部屋だった。

水晶のようにきらきらと輝く鋭角的な体の生き物が数人、彼女の眼前で向かい合って話をしている。

外に出ようと手を伸ばしてみるが、見えない壁にぐるりと囲まれており、辺りを見回すと似たような状態の人間が数人、透明な筒のような容器に入れられて眠っている。

佐天は自分が何者かに捕まっていることと、自分と同じような人間がたくさんいることを知り、この後一体どうなるのだろうかと冷や汗をかいた。

自分の他に誰もいない以上、頼れるのは 自分 しかない。佐天は自分の心の奥底に潜むウルトラマンを引っ張り出して問う。

「なんなのよここ! なんなのよあれ! なんであたし、こんな場所に閉じ込められてるわけ!？」

「なんでも何も捕まっただよあいつらに! ああくそつ、なんでこうなるんだ……」

なんでだとはやき、頭を抱えるウルトラマン。壁を叩いたことで

レノム星人たちは、佐天が起きていることに気付いて近寄って来ている。非常にまずい状況だ。

だが佐天は臆することなく、落胆したウルトラマンに向かい微笑んで答えた。

「でもさ。あたしがこうして捕まっているってことはさ、あの黒子って人を護ったってわけなんだよね？」

あんた、少しはウルトラマンらしいことできるんじゃない。ちょっと見直した」

「はあ？ そんなの偶然そうだっただけで……」

「偶然で結構。それに自分で戦うのが嫌だっていうんならその力、あたしに貸しなさいよ」

「何ッ、そんなこと出来るわけが」

出来るわけがないと否定するウルトラマンだが、佐天には勝算があった。

彼は自分に 体の主導権はお前にある と言っておきながら、佐天の体に乗っ取って逃げ出したのだ。そんなことが可能ならば、逆ができない道理はない。

佐天は目を閉じて息を深く吸い込み、周りを覆う壁に手を当て、力を込める。

彼女の体から赤いエネルギーが発せられたかと思うと、人の力では到底破ることのできなかつた透明な壁は、何かが弾ぜる音と共に粉々に砕け散った。

「馬鹿な。人間が ケージ を破れるはずがない。馬鹿な」

「強度計算は事前に済ませていたはずだ。強度計算」

予想外の出来事に狼狽えるレノム星人たちを尻目に、佐天は美しいルビーの宝石のように紅く輝く目を見開いて口を開く。

「人間 を閉じ込めるケージなら、ね。おあいにく様。あたしはもう、普通の人間じゃあ……ないのよッ！」

散らばる破片を避けて床に降り立った佐天は、彼らが知覚するよりも早く地を駆け、一人には腹部に体重の乗った正拳突きを、背後より迫る一人には後ろ回し蹴りで頬（に当たる部分）を捉え、怯えて逃げ出そうとするもう一体には周囲に散らばった大きな破片を後頭部目掛けて投げつけて、その全てを叩きのめす。

物音を聞き付けてやってきたもう一人も、何が起こったのかと目を白黒させていた。

「どうしたことだ。何故我が同胞が人間に伸されている。どうしたことだ」

「あんたが親玉？ ヴアルハラで懺悔しなくなったら、こいつら連れてとつと自分たちのお家に帰んな！ おっと、人質を全部返した上でね」

自信満々にそう言って親指を立てる佐天を、レノム星人の元締めらしき人物は舐め回すようにして見つめる。そうして何かに気付いたのか、彼は抑揚のない乾いた笑い声で言った。

「そうか。私たちを追ってきたM78星雲の警備隊員だな、そうか。しかもその声その姿。追ってきたのは弱虫の方と見える。私たちの宇宙船を目の前に怖くなって逃げ出したやつだ、私たちの。ならば安心だ。我々が君のような弱虫に負けるはずがない。ならば安心だ」

不気味な笑い声と共にそう語るレノム星人の言葉をウルトラマンは否定しない。それは凶星で、彼にとつても省みたくなく、尊厳を著しく傷つけられるような事柄だったのだろう。

それでも彼は歯を食い縛り、憤怒を込めた静かな口調で佐天に語りかけた。

「おい、お前。名前は？」

「あたし？ あたしは佐天。サテン レイコ 佐天涙子だよ。それが？」

「お前のスカートのポッケにペンが入っているだろ。そいつを出して突き出せ」

「はあ？ なんてそんなことを」

「この姿じゃいつもの二十分の一も出せねえんだ。そのペンを使えば俺はあの姿に戻ることができる。弱虫だなんて言われて黙ってられるか。俺自身の手でケリをつけてやるんだよ」

「そんなこと言われても……」

「言ったつてもへつたくれもねえ！ お前が体の主導権握ってんだから、勝ちたきや俺の言う通りにしろってんだ」

唐突な発言に驚きを隠せないが、じつくりと考えているだけの余裕はない。レノム星人の元締めは右手を掲げて佐天目掛けて光線を放とうとしているのだ。

外で撃たれた時はここまで転送されたただだが、転送先であるここでそれを受けてどうなるかはわからない。

「排除。弱虫は出ていけ。排除」

「ええいもう、どうにでもなれッ！」

光線が彼女の体に迫る中、佐天はポケットからペンを取り出し、自分と光線の間割り込ませる。

そこから発せられた光は梅の花のような形を成し、光線を弾いて散らした。

佐天が驚き戸惑う中、梅の花の光は彼女の胸元に取り付き、体を金色に染めて行く。

彼女が再び目を見開いた時には、身長四十メートル、体重一万五千トン、光の国からやってきた光の巨人、『ウルトラマンマグナ』へと姿を変えていた。

M78星雲の宇宙人と一心同体となった佐天涙子は、特殊な力を持ったペン・“マグナコミュニケーション”でウルトラマンマグナに変身した。

マツハ一のスピードで空を飛び、二十階建てのビルをも軽々と持ち上げ、強力なエネルギーであらゆる敵を粉碎する超常の存在となったのだ。

それ行け！ 我らのヒーロー！

日が落ちきり、夜空を星を照らし始める宵、ウルトラマンマグナが地上に顕現する少し前。

白井黒子は鉄針についた発信器の反応を追って、街外れの大きな倉庫の前に足を運んでいた。人っ子一人見当たらない閑散とした場所だったが、その周囲にはただならぬ気配が漂っており、何かあることだけは読み取れる。

黒子は携帯電話を片手に一際大きな扉に手をかける。案の定鍵がかかっていて入ることは叶わない。

「初春、この場所で間違いありませんの？」

「はい。びんびん来てます。そこのはず……なんですけど、違いましたか？」

「問題ありませんわ、私にとっては取るに足らないこと。ご苦労様、初春」

「白井さん、気をつけてくださいね」

黒子はありがとと礼を言って電話を切ると、扉に手を当てて念を込め、その奥に広がる空間へと自分の体を転移させた。

黒子が再び目を見開くと、（佐天たちが閉じ込められていた場所とは違う）視界一杯にモニターが敷かれた不気味な部屋へと転移していた。

「ここは一体どういった場所なのでしょう……。あ、あぁっ、あれは！」

目に悪い光に眩みながらも、ここは一体どこなのかと周囲を見回す黒子。彼女は自身の背後を振り向いて啞然とした。

彼女の目線の先には、どう使うのかよく分からない幾何学的な形の操縦桿そつじゅうかんと、その上に取り付けられた”ケージ”の中で苦悶の表情を浮かべて眠っている少女。御坂美琴の姿だったのだから。

「お姉様！ あぁお姉様あぁッ！ なんとという……なんとというお姿

に！」

黒子は鼻水を垂らし涙声でケージを叩くが、叩いた音がケージの中に反響するだけで傷ひとつつく気配はない。

空間転移によって連れ出そうとするも、ケージには何らかのプロテクトがかかっているらしく、中に入り込むことは敵わない。

自分が相手にしようとしているのは今まで以上に超常の存在であることを実感すると同時に、黒子はどうすればいいのかと頭を抱えた。

「見付けた。逃がした目撃者、見付けた。今度は逃がさない」

その物音を聞き付け、レノム星人の一人が霞のようにどこからともなく現れ、黒子の背後に立った。

左脇腹に刺さった鉄針が抜かれずに残っていることから、黒子を襲い、ウルトラマンを拉致したあの個体と同一であることが分かる。

彼が日本語を理解できると知った黒子は、物怖じせずに見開いて彼に問う。

「あなたですね？　ここ数日の人さらいの犯人は！　そしてあなたですね！　お姉様にこんな辱しめを受けさせたのは！　今すぐ解放なさい！」

「それはできない。彼女はこの船の動力源にする。この星を抜け出すために必要。それはできない」

「どうやら話しても無駄なようですのね」

「無駄だ。君は私たちの餌にする、無駄だ」

挨拶もなしに左手を掲げて光線を放つレノム星人。予備動作なく放たれる光線に戸惑いながらも鉄針を拳に挟み、空間転移で彼の背後に回る黒子。

「そう簡単に倒されるはずがありませんの！　喰らいなさいッ」

拳に挟んだ鉄針を投げつけようとする黒子だが、星人は彼女が動くよりも先に転移した場所に振り向いて光線を放った。

黒子は仕方なく手に持っていた鉄針を放り、再び転移して距離を取る。攻撃することは敵わなかったが、放られた鉄針は黒子の力で

転移して星人の体のあちこちに刺さり、彼に悲鳴を上げさせ、行き場をなくして放たれた光線は、モニターに人一人収まるほどの風穴を開けた。

「喉元に突き立てるつもりでしたが……、そう上手くはいきませんわね」

「痛い！ 絶対に許さんぞ、痛い！」

怪我を負っても星人の猛攻は止まらない。自分たちの船に穴を開けられて激昂し、転移位置に合わせて的確に光線を放って行く。

黒子は光線の波状攻撃から逃げ回るだけで精一杯だ。

「嗚呼、なんとということ！ なんとつつとおしい！」

舌打ちをして地団駄を踏むが、星人の狙いは寸分の狂いなく撃ち続け、徐々に黒子を追い詰めて行く。

能力の連続使用で疲労が溜まり、肩で息をする黒子の眼前に星人の光線が迫る。空間転移で逃げるには距離と時間が無さすぎる。黒子は咄嗟に首を捻ってなんとかかわせたが、それがいけなかった。

光線を避けた先にあったのは、美琴が入られていたケージの中だったからだ。ケージを伝う光線はその内部にまで達し、覚醒した御坂美琴は声にならない叫びを上げてのたうち回った。

「お、おお、お姉様ツ！？ お姉様ーッ！ あああ、なんとということ！ お気を確かに！ お姉様ああ！」

のたうち回る美琴の姿を自分のことのように苦悶の表情を浮かべ、この世の終わりだとも言い上げたげな顔でケージにすがりつく黒子。

だが美琴は彼女の心配をよそに、体にまとわりつく煤ススを払うと、目を見開いてケージに両手で頬を張り付かせ口を開いた。

「ちよっと、何よこれ！ なんであたしこんな所に閉じ込められているわけ！？ まさか黒子、あんたの仕業じゃないでしょうね！？」

「誤解ですわお姉様！ お姉様にこのような辱しめを与えたのはその化け物……」

「化け物？ なによそれ意味が分から……っつてうをわっ！」

黒子の指差す方向に立っていたのは、きらきらと輝く鋭角的で眼のない二足歩行の異星人。地球人からすれば化け物と呼んでも差し支えない代物だろう。

初めて目にする人でない存在に、美琴は奇声を上げて顔をひきつらせた。

「落ち着いてくださいお姉様。見た目は確かに化け物ですが、鉄針は刺さりますし、肉体の強度は人間とさほど変わりありませんの。そしてなにより、こいつが！ お姉様をそんな実験用ビーカーに閉じ込めた張本人ですよ！」

張本人、ですって！？

その単語を聞き取った美琴は恐怖ではなく怒りで顔をひきつらせる。

美琴の怒りに呼応するかのようになり、彼女の頭から プラズマ が生じ、徐々に形を成して雷へと姿を変えていった。

「よくもこんな所に閉じ込めて変なことをしてくれたわね。あんたは、あんただけは！ たとえ何百回謝ったって許さないんだからッ！」

美琴は満ち満ちた雷を一点に収束させて一気に放つ。

直撃を受けたレノム星人は、黄色い閃光にその身を焼かれ、モニターを突き破って船外へと吹き飛ばされた。

これが学園都市に数人しかいないとされる『エレクトロマスター電撃使い』御坂美琴の超能力だ。

彼女が能力を発現させる前に空間転移で距離を取っていた黒子は、美琴の常識外れな能力に惚れ惚れしつつ、閃光と爆発が止んだのを見計らい、ケージの中から抜け出し地に足をつく美琴に声をかけた。「お見事。さすがはお姉様ですの。ああ足元にお気をつけ下さいまし。先の衝撃で破片が……」

「これくらいどうってことないわよ。肩も貸してくれなくて結構。自分で立って歩けるわ。にしても、何なのかしらね。あの化け物は」「詳しい事は警備員や研究員の皆様に引き渡してからになりそうで

すの。何しろ今日は昼時から意味不明な事ばかり起きておりまして、考えをまとめるだけの時間がなく……」

「何よその 意味不明な事 って。あたしにも分かるように説明してよ」

「ああ。お姉様は昨晚から捕えられていてご存知ではありませんでしたわね。実は今日の昼下がりに……」

何も知らない美琴に、昼間の『特撮ドラマ』のごとき怪異を説明しようとする黒子だったが、大穴の空いたモニターの先を見たことによりその必要はなくなった。

彼女たちの目に飛び込んで来たのは、夜の倉庫街で戦いを続ける三人のレノム星人とウルトラマンの姿だったのだから。

「なに……、あれ？ テレビの撮影？」

「残念ながら……、本物ですの。撮影とかどつきりだとか、そういうものではなく」

あまりに超然とした絵面に、美琴は口を開いて呆けるしかなかった。

それは美琴がケージを突き破る少し前のこと。

姿を自在に消し、視覚野の範囲外から攻撃を仕掛けてくるレノム星人に、我らがウルトラマンマグナは苦戦を強いられていた。

一対一ならある程度動きを予測して戦えるが、一対複数では一人の動きを追うことに集中するあまり、残りの二人から完全に無防備となってしまう。

今のマグナに必要なのは複数の動きを同時に止める術だが、光線すら満足に撃てない彼にそんなものがあるわけもなく、攻め手なくやりたい放題にされ、周囲の建物を派手に壊して瓦礫を散らせるだけであった。

「ああんもう！ 見えないうえに三人って、勝ち目まるでなしじゃ

ん！ なんかないのマグナ！？」

「あつたら俺が聞きたいくらいだ！ 無茶言っつたの！」

どうにもならないことだと、両者共に頭では理解している。してはいるが、誰かに文句をぶつけないと恐怖と不安に押し潰されそうだったのだ。

「くそっ、何かないのか！ こいつらを止められる方法は！」

殴られても蹴られても歯を食い縛って立ち上がるが、対策が浮かんだわけではない。

自分はこのままやられてしまうのか。佐天とマグナがあきらめかけたその時、美琴が放った電撃が船を突き抜け、彼らの前を横切って消える。するとどうしたことが、一瞬の閃光の後突如攻撃の雨が止み、レノム星人の誰もが豚のような鳴き声を上げ、実体を表した上で苦しみ始めたのだ。

マグナは首を傾げつつも立ち上がり、どうしたことかと思案を巡らせ、一つの結論に達した。

「見えたぜ、こいつの突破口！」

「えっ、何！？ 何か分かったの？」

「後は俺に任せる！ やってやるよ。ああ、やってやらあ！」

マグナはそう言って胸の腕を組む。カラータイマーの辺りにエネルギーを集中させ、満ち満ちたエネルギーを光に変えて一気に解き放った。

太陽のように強く明るく輝くそれを浴びたレノム星人たちは皆顔を押しえてうずくまり、水晶のように美しく輝くその体を夜の倉庫街に晒した。

「えっ、これってどういうこと！？」

「思い出したんだよ。こいつらは水晶みたいなその体で光を反射・屈折させて姿を消す。だが、その光をやつらは取り込むことができなないんだ。差し詰め、強すぎる光を反射出来ずに取り込んで、視覚機関を潰しちまったってところだろ」

「そういうものなの？ ……って！ マグナ、カラータイマーが」

佐天が焦るのも無理はない。今まで青く輝いていたマグナのカラ
ータイマーが赤く点滅を始めていたのだから。

ウルトラマンマグナの活動エネルギーは地球では急激に消耗する。
彼が巨大化して戦える時間はせいぜい二分半。しかもエネルギーを
強烈な光に変えて放射する大技を使っているのだ。体力は一分も持
たないだろう。

マグナはそれを知った上で、目を潰してのたうち回る星人を見下
ろしつつ佐天に言葉を返す。

「ああ。とつとと決めてやるさ。お前がやった、あの技でな！」

マグナは両の手を十字に組んで、エネルギーを集中させて行く。

ウルトラ一族必殺の『スペシウム光線』の構えだ。

だがマグナはそれを光線として使うことはない。集束させたエネ
ルギーを両の拳に集めて、それをレノム星人に拳と共に叩きつける
のだ。

マグナは地に伏して一列に並ぶレノム星人に向かって走り出し、
一番手前の相手には素早い左ジャブ、真ん中の相手には腰を強く捻
つての右ストレート、最後は上体を沈み込ませての左アップパーをそ
れぞれに叩き込んだ。

狂った豚のような荒々しい悲鳴を上げ、ダイヤモンドの結晶のよ
うに美しく輝く破片を撒き散らし、三体のレノム星人はこの世界か
ら消え去った。

それと同時に活動時間の限界が来たらしく、マグナはそれを見届
けた上で霞のように消え失せた。佐天涙子の意識はそこで一旦途切
れることとなる。

「　　よお、瓦礫の城のお姫様。やっとお目覚めかい」

「　　うう……うん？　ビミョーに嬉しくないお言葉、どうもありがと」

佐天が目を覚まし、再び意識を取り戻した場所は、ウルトラマン

やレノム星人たちが積み上げた瓦礫の山の頂だった。

やや嫌味たらしいウルトラマンの言葉に憎まれ口で返し、佐天は瓦礫の山を滑り降りつつ、彼に向けてぼそりと漏らした。

「弱虫 なんて言っつてゴメン。かっこよかったよ」

「褒めたつて何も出ねえぞ。それにあんな思いはもう御免だ」

満更でもなさそうな口調でそう語るウルトラマンに、佐天は胸を軽く叩いて言った。

「ねえ、マグナ。あんたは自分を落ちこぼれだつていうけど、何も無いあたしにとっては最高に凄い力なんだよ。でっかくなれて空飛べてさ。羨ましいことこの上ないつての。そんなに自分を卑下することなんてないよ。あんたは強い。仲間や他の宇宙人たちが認めなかつたつてあたしは認めるよ。だから、さ。自分を弱いとか落ちこぼれなんて言わないでよ」

「そうは言っつがな、俺は何もしちゃあ」

自信無さげにそう語るウルトラマンに、佐天は胸を叩いて自信満々に言う。

「あんたは変えてくれたよ。あたしの目に映る景色に色をくれた。あたしにとつてはそれで十分。マグナはもうひとりじゃない。一人だけじゃ落ちこぼれでも、二人で一人ならせめて半人前ぐらいにはなれるでしょ？」

「ずいぶんと親身だな。正直ありがた迷惑だぜ。何か裏でもあるんじゃないかねえのか？」

「バレた？ まあ、裏があるつていうかさ……その方が面白そう！ だから、かな」

「とんだ馬鹿野郎と一蓮托生になつちまったもんだ。何が起きても一切責任は取らないからな。覚悟しとけよ、佐天^{ソテ}！」

「うん。これからよろしくねマグナ。……あれ？」

ソテー？

レノム星人たちがウルトラマンたちによって殲滅された後。

黒子は空間転移の能力を用いて、完全に機能を停止した船から捕まった人々を救い出す作業を続けていた。

捕まっていた人々は皆一様に虚ろな目をしてどこか宙を見ていたが、ケージを出て外気に触れると共に正気を取り戻して狼狽え始め、事情を説明するのがとても面倒だったという。

面倒はあったものの、捕虜無事安全な場所に移され、残りは星人たちの指令室で空を見上げて物思いに耽る美琴一人となった。

「お姉様。他の被害者は全て安全な場所に移送しましたの。残りはお姉様ただ一人、さあ黒子の手を握ってくださいましっ」

そう言っつて自分の手を差し出すが、美琴はそれにきづかず虚ろな目のまま呆けて空を見上げている。

黒子はレノム星人の食い物にされた後遺症が残留しているのではないかと狼狽えるが、美琴が小さな溜め息と共に信じられないような一言を口にした。

「かつこ……よかったなあ。あのウルトラマン。大きくて、強くて、素敵で……いいなあ、いいなあ」

「……はい!？」

まさか、こんな反応を返してくるとは。逆に今度は黒子が口をあんぐりと開けて呆けてしまった。

第二話：御坂美琴ゆうかい事件（後書き）

次回予告

紆余曲折ありつつも、ウルトラマンとしての自分を認めた佐天涼子。

自分の中にある力を人助けに使おうと東奔西走するが、その行き過ぎた行動は風紀委員である黒子の目に止まり……。

そんな中、学園都市に巨大怪鳥『コウチンガ』が襲来。本能のままに街を蹂躪する怪鳥に、我らがウルトラマンマグナは打つ手はあるのか？

次回ウルトラマンマグナ、『ウルトラマンの流儀』。

来週も、みんなで読もう！

第三話・ウルトラマンの流儀（前書き）

無能力者・「佐天涙子」は、史上最弱のM78星雲人との不慮の事故で命を失う代わりに、超人「ウルトラマンマグナ」へと変身する力を得、彼と同化して一心同体の存在となった。この先どうする？ この先どうなる

第三話：ウルトラマンの流儀

・粗暴凶暴乱暴怪鳥・コウチンガ 登場

いくら非核三原則や他の大国に護られ、表面上は平和な国であるうが、世界が羨む最先端テクノロジーの粋を集めた科学の都であるうが、理不尽な理由を振りかざして暴れ回る犯罪者の増加は後を立たない。

平和でない国に争いは付き物だが、平和すぎるというのもまた考えもの。そこに住む人間に常人が到底持ち得ない超能力が備わっているとなると尚更だ。

今日もまた真っ昼間の街角でろくでもない暴力沙汰が起きようとしていた。

「いやっ！ やめて、助けて……」

「ひひひ、いい声で啼くじゃねえの。俺はそういつのにも目がなくなてなあ。ほら、もっと啼け！ 啼けっば」

「はっは、兄貴の 怯え少女萌え には頭が下がるなあ。性癖がアブノーマル過ぎて逆に尊敬しちまうぜえ」

「しかもレベル三の能力、『トビケンケ肉体改造』の使い手だっけ言うんだからなあ。俺だったらブルって漏らしちまうよあ」

非常に自分本意で怯えて震える少女に手をかけようとするこちらの男。自分の能力を誇示し、自身の欲求を満たしたいがために、か弱い女の子を襲って回っているのだ。

叫べども助けは来ない。目の前の男は能力を用い、自分の体を一回りも二回りも大きく見せて少女を更に怯えさせて笑っている。こんなことが許されてよいのだろうか。良いはずがない。

待て待て待てえーい！

彼女の助けに応じるかのように、空から赤く長いマフラーで顔を覆った何者かが現れ、二人の間に割って入ったのだ。

「なんだおめえ。お前も俺たちにボコられたたってか？」

「兄貴に歯向かおうとはいいい度胸だなコラア！」

「兄貴い、こんなやつぶつぱしてくださいよオ」

能力者の男と二人の取り巻きは華奢な体つきのマフラーの人物を舐めきり、安い言葉で威嚇するが、当の本人は興味がないらしく一言も言葉を返さない。辺りに気まずい沈黙が流れ、痺れを切らせた能力者は体を一回りも二回りも大きくさせてマフラーの人物に飛び掛かった。

「出たアー！ 兄貴の超絶突進グレイストライクーッ！」

「ダンプカーもぺしゃんこにする一撃だぜえ！ こりやもう死んだな。はっはっは」

街角に響く鈍く思ひ音。技をかけた本人もそれを見ていた取り巻きも勝利を確信して嫌らしい笑みをこぼし、襲われていた少女は体を震わせて目を背ける。

しかしどうしたことだろう。能力者の渾身の突進はマフラーの人物の右人差し指一本に止められて、それ以上先に進めずにいた。

あまりのことに事態が飲み込めず、口をぱくぱくと動かすだけの能力者に、マフラーの人物は口元をにやりと歪ませていたずらっぽく笑った。

「ちよつとちよつと、これでオシマイ？ こんなものでレベル三とは呆れちゃうわねー。じゃあま、とつとと終わらせちゃいますか」

マフラーの人物は人差し指を軽く弾いて軌道を軽く反らして彼の手を握ると、思い切り力を込めて能力者の拳を砕き、残る左腕を振り被って彼の腹部に強烈なアッパーを見舞った。

骨の碎ける音と共に腹の肉が強く波打ち、男は数メートルほど持ち上げられた末に口から赤黒い血を吐いて地面に叩きつけられた。

「あ、ああ、兄貴！」

「やべえ、マジやべえよこいつ！ 逃げろお」

二人の取り巻きは慌てふためき、自分の身かわいさに一目散に立ち去ろうとするが、マフラーの人物は彼らの行く手に先回りして無理矢理足を止めさせた。

「兄貴の失態は子分の失態。あんたたちも悔い改めなさい、病院でね」

マフラーの人物は横並びになった二人の右と左のこめかみをそれぞれ掴み、勢いをつけてそれぞれのこめかみに叩きつける。頭蓋骨にヒビが入り、二人は恨み言を言うことなくその場に伏して二度と立ち上がっては来なかった。

「ふう。今日もお疲れさま。さあてと」

マフラーの人物は携帯電話を取り出して救急車を要請すると、目を背けて震えている少女の肩を抱いて言った。

「周りが血生臭くつてごめんね。もう大丈夫だよ」

「あ、あの。あなたは一体」

「あたし？ あたしはねえ……そうだなー」

「……ですって。いやあすごいですよねえ『レッドバニッシャー紅の執行者』。どこからともなく現れて、あつという間に敵をやっつけ、礼を求めず去っていく。ああ、ヒーローですよねえ。憧れますよねえ」

「はあ。うんまあ、どうも」

「ほへ？ どうして佐天さんがありがとうって」

「ああいやいや！ なんでもない、なんでもないですよお」

「佐天さん、最近何だか変ですよ。今日だってほら、両眼に隈が」

「えっ、うそッ。どこ？ どこよ！？ 目立ってる？」

「そんなに目立たないですけど……。あ、そうだ。ベビーパウダーみたいなものならありますよ。これでごまかしてみたらどうですか

「？」

「ああうん。ありがと、初春」

ある日のサイゼリア店内。佐天涙子と初春飾利はドリンクバーを注文して軽く談笑をしつつ、約束を取り交わした誰かが来るのを待っていた。

レッド・パニッシャー

『紅の執行者』。数日前から学園都市に出没するようになった、赤いマフラーで顔を隠し、ジャッジメント風紀委員や警備員アンチスキルの目の届かないような場所や強い相手をも容易く仕留め、見返りを求めないで去っていくと言う謎の存在。

当初は人知れず暴漢や変質者を成敗していたのだが、その様子が大手動画サイト”YOUTOFU”にアップされたことを皮切りに、急激に認知度が上昇。現在では学生の中では知らぬものはいないとまで言われている。

「しかし紅の執行者、紅の執行者ねえ。お前、ネーミングセンスないんじゃないの？」

「ええーっ。格好いいじゃん、アウトローな正義の味方っぽくてさ」
「俺だったら、噂が掻き消えるまで街から姿を消すね。恥ずかしくつてたまらねえ」

そんな佐天に 心の中から 意見するウルトラマンマグナ。心身共に一心同体である二人の間に嘘や隠し事は無意味。考えていることが筒抜けなっているのだ。

佐天はその煩わしさを言葉に込め 心の中で 言い返し、それを聞いたマグナは苛立ち混じりに言葉を続ける。

「しかしなあ。お前だけが褒められてるってこの状況が納得いかねえ。お前の力の源は俺なんだぜ。何か還元されたっていいはずだろう」

「別にいいけど、そしたらまた変なやつらに襲われるんじゃないの？ 白井さんとか黒子さんとかそういう人にさ。この星じゃあんたみたいなのは目立つと思うよ」

「俺が自由に動けないことをいいことに好き勝手やりやがって。一

心同体じゃなきゃ見捨ててしまいたいところだ」

「はッ、好き勝手何も合意の上でやってるんでしようが。だいた
いあんた、元々落ちこぼれのくせに、人気取りで顔出ししようなん
て虫が良すぎるとは思わない？」

「居候 の分際でいけしやあしやあと。お前だって同じなんじや
ないのかよ」

「あたしは違うもん。力がなくて泣き寝入りしている人たちの力に
なりたいただけだもん。それに居候って言いますけどね。そもそもあ
たしをこんなにしたのはあんたのせいじゃない！ あんたにそうや
つて説教する資格があるとは思えないんですけど」

「なんだと！？」

「なによ！」

「あのー、もしもし？ 佐天さん？ 佐天涙子さーん」

「あ。は、はは……はい！ って、あんたは！」

心の中での 会話 に夢中になるあまり、声をかけている自分の
眼前の人物にすら気付かなかった佐天。

あわてふためき生返事を返すが、彼女は声をかけてきた人物を見
て啞然とした。

「ごきげんよう佐天さん。私、ワタクシ常盤台ジャッジメント中学校の風紀委員の……って、
以前にも言いましたわね」

怪訝そうな表情で呼び掛ける茶髪にツインテールの少女。

以前佐天を御坂美琴誘拐事件の犯人と疑い、能力を用いて襲いか
かった白井黒子シロイその人だ。

「ご丁寧にどうも……、それで、どうしてここに？」

「私は別に何もありませんし、暇ではないのですが……あぁっと、
失礼」

黒子は軽く溜め息をついて左手を自分の隣に座る少女へと向ける。
茶色かったショートボブの髪型の少女がそこにいた。

「ご紹介しますわ。このお方こそ常盤台のエース、『エレクトロロマスター電撃使い』の

”御坂美琴”お姉様ですの”

「あなたが佐天さんね。今黒子が言った通りよ。よろしくね」

「御坂美琴……って、あのレベル五のあの御坂美琴ミサカミコトさんなんですよね！？ あた、あたし佐天涙子って言います！ どぞ、どぞ、よろしくッ」

美琴は軽く会釈して左手を差し出し佐天に握手を求め、佐天は喜びに頬を緩ませ笑顔を作り、その手を握ってぶんぶんと降った。

「おいおい。高レベル能力者は嫌いなんじゃないのか？ お前、どーしよーもねえ落ちこぼれだしよ」

「それはそうだけど御坂さんは別よお。何しろレベル一から必死に努力を重ねて、今じゃ学園都市でも五本の指に入る程の実力者なよ。かつこいいなあ、憧れちゃうなあ、あたしもそうなりたいなあ」
「そういうもの、なのかね。ゲンキンなやつ」

マグナはつまらなそうに呟いて心の奥底に引っ込む。

佐天は握る手にさらに力を込め、美琴と知り合えたことの嬉しさを全身で表現した。

憧れの人に出会えて有頂天になる佐天だったが、美琴は彼女以上に樂しげな顔つきで、吸い込まれそうなほど純粋な瞳で佐天を見つめ、彼女の手を強く握りしめた。

「それはともかくっ。あなた確か、数日前に”ウルトラマン”に助けられたのよね？ そうなのよね？ そうなんだよねッ！」

「ええっ！？ ウルトラマンっていうとあの……、ビルぐらい背が高くて、赤だの青だのの目に、銀色の体の、あの？」

「それよそう！ 光の巨人のウルトラマンよ。佐天さん。落ちついて……、っていか引かないで聞いてくれると嬉しいんだけど。あたし、ウルトラマンに憧れてるの。どーしても会ってお礼が言いたいよー。佐天さんはあの日、ウルトラマンが消えた場所の近くで倒れてたって聞いて。彼について何か知らないかなあって。ねえ、ねえっ」

「あは、あはは。あたしもその、気絶しちゃってたから……そこま

で詳しくはー。あははっ」

「なあんだあ、残念。うん、でも。仕方がないよね」

” お目当てのウルトラマンはここにいます” とは言えず、乾いた笑いと曖昧な言葉でお茶を濁す佐天。

超がつくほどの名門学校に在籍し、自分はおるか学園都市内でも羨望の的である美琴が、自分ウルトラマンに憧れを抱いているという事実、佐天は少しだけ背中がこそばゆくなった。

黒子はやはりそうか、時間を無駄にしたと溜め息をつき、美琴の襟首を掴んで言った。

「お姉様、これ以上彼女に聞いても無駄のようです。そもそもいい歳してウルトラマンなんてよくわからないものに夢中になるとは少しは世間体というものを考えていたくださいですの」
「世間体って何よ世間体って。好きなものを好きって言っちゃいけないの？」

「お姉様は学園都市でも有数の高レベル能力者。他の人々の手本となるべき存在ですよ。そのようなお方がウルトラマン。ウルトラマンなどという都市伝説の様に惑わされて……。示しがつきませんの」

美琴の行いをたしなめ、お小言をこぼす黒子。居心地の良くない空気に辟易した初春は、なぜ自分たちを呼んだのかと黒子に問いかけた。

「それはそうと白井さん。今日はどうしたんですか？」

「呼んだ目的の大半はお姉さまのお戯れですの。まあそれとも一つ、” 怪獣騒ぎ” のことで貴女方に伝えておくべきことが一点……」

「怪獣のこと？ 何かあったんですか？」

「ええ。実は」

黒子が何かを言おうとしたその時、佐天は店の外から” 悲鳴” が聞こえているのに気付く。

彼女たち普通の人間には分からない、ウルトラマンだからこそ聞こえるような、か細く、弱々しいものだ。

何かは分からないが、良からぬことが起きていることは間違いない。佐天は黒子の言葉を遮って立ち上がった。

「ご、ごめん！ あたしちょっと……用事を思い出したから、じゃね！」

「えっ、ちょ、ちょっと待ってくださいよ佐天さん！」

いきなりのことで戸惑い、初春は彼女にどこに行くのかを問おうとするが、佐天はごめんただけ言葉を残してサイゼリアを去って行く。

初春と美琴は頭に疑問符を浮かべ首を傾げるが、黒子は一人”やはり”とつぶやき、佐天に続いて立ち上がる。

「どうしたのよ黒子。急に」

「申し訳ございませんお姉様。私も少し用事が……お代はここに置いておきますので、暫し、暫しの間初春と一緒にいてくださいまし」
「用事って、あんた今日風紀委員の仕事休みだったんじゃないの！？」
「ねえっ、ねえーッ」

テーブルの上に五百円玉と百円玉二枚を置き、美琴の制止も聞かぬまま空間転移でその場を去る黒子。サイゼリアのテーブル席には、事情を何も知らない二人の少女が残された。

「行っちゃい……ましたね」

「そう、だね」

お待たせしましたー、ティラミスとサイズ二つにブレンドコーヒー一杯、いちごシロップアイスクリームになりませう。ご注文は以上でよろしかったでしょうかー。

「料理も来ちゃいましたね。どうしましょうか」

「そうね……。お金置いてってくれたみたいだし、食べちゃいましよっか」

「そうですね」

二人の少女は目の前で手を合わせ、分不相応に盛られたデザートに手を付けた。

「はい、そこまで。あんたたち、張り合いなさすぎっ」

「く、くそお……お前が噂の赤の執行者かよ……」

「レベル……っていうか格が違いすぎや……しねえか、おい」

それから数十分後。街外れの暗がりの中で、ウルトラマンの力を行使し『紅の執行者』が不良たちを叩きのめしていた。

武器を持っていようが能力者だろうが、今の自分に敵はない。佐天は横たわる不良たちの背中を踏みつけ、満足げな笑みを浮かべた。

そこまでですの！ 両手を壁について大人しくなさい！

そんな佐天に臆することなく、厳しい口調で大人しくしろとまくし立てる人物が現れた。彼女を追ってファミレスを出た白井黒子その人だ。

黒子は左手の腕章を突きだし、自身が『ジャックシメント風紀委員』であることを佐天に見せつけ、しっかりとした足取りで彼女の元へと歩を進めて行く。

「いちいち説明するのも面倒だ、俺に代われよソテー佐天。ぶちのめしてやるうぜ」

「誰がソテーよ、佐天だっつーの。厄介事増やしてどうするのよ。あたしが穩便に済ませるから、あんたは引っ込んで」

こんな奴叩きのめしてしまえば済むとはやるマグナを、佐天は風紀委員に目をつけられたらここにいられなくなる。厄介事は御免だとなだめる。

体の主導権を得た佐天は、明らかに媚を売るような態度と作り笑いを浮かべ、黒子の言葉に手を揉んで答える。

「な、なな。なんでしょお白井さん。あたしい、ただの一般市民ですよ。何も悪いことなんかしてないですよー」

「ただの一般市民は不良を足蹴になどしませんの。媚を売る暇があるのなら、自分の足元ぐらいきちんと把握しておくべきではありません」

せんのか？ 佐天涙子……、いや、光の巨人『ウルトラマン』」

「それもそうだ……って、ええっ！」

瞬間、佐天の顔は焦りで強張る。紅の執行者の正体がばれるのは仕方がないとしても、ウルトラマンであるとばれてしまうのは想定外の範囲外だったからだ。

「その反応、凶星のようですね。ビルより高い怪獣に光の巨人が跋扈する……こんな荒唐無稽な話が現実に取り得るとは。今でも信じられませんの」

「いや、いやッ！ ウルトラマンですよ？ テレビのヒーローなんですよ！？ そんなもの、いるわけないじゃないですか！ 何言ってるんです」

信じていないのなら信じないでいいじゃないかと大袈裟に両手を振って弁明する佐天。黒子は彼女の迷惑とは裏腹に、腕の腕章を見せ付け機嫌の悪そうな顔で詰め寄った。

「おだまりなさい佐天涙子。器物破損に理不尽な暴力、そして私刑。諸々の容疑 であなを逮捕させていただきましたの」

「よっ、容疑い！？ 何よそれ意味分かんない！ あた……いいや、紅の執行者は悪い奴らを叩きのめして街の平和を守る正義の味方でしょうが！ なんでそんな人がしょっぱかれなきやならないんです」

「この街の治安を護るのは風紀委員と警備員アンチスキルですの。正体を明かすうともせず、勝手気ままに暴れ回る卑怯者の自警団なんて、学園都市には必要ありません」

ちよつと待てよ。そいつは聞き捨てならねえな、黒子クロコちゃんよ。

「ぐ、ぐるこ……！ は……ッ!？」

自分たちのことをよく知らないで勝手なことばかり言う黒子に、佐天の中のマグナが切れた。

青い目が変わった佐天は詰め寄る黒子の首根っこを掴んで軽々と持ち上げた。

「言わせておけば勝手なことをいけしゃあしゃあと。気に入らねえなあ、そういう まともなのは自分たちだけ みてえな態度はよお。俺たちが何をしてきたか知らないくせに、えらそうに」

まるで男のように荒々しく不遜なこの態度。同じぐらいの背丈や体つきなのに関わらずこの怪力。黒子の疑問が確信に変わった。

黒子は空間転移で拘束を逃れ佐天の背後を取ると、小型のスタンガンを取り出して彼女の首筋に押し付けた。

「とうとう尻尾を出しましたわね、ウルトラマン。神妙にお縄に付きなさいな」

「それで威嚇のつもりか？ 俺は何も悪いことなんかしちやいねえ。脅されたって謝りなんかしねえぞ」

「でしょうねえ。私も、言ってみただけですの」

こいつに脅しは通用しない。そう確信した黒子はスタンガンの電源を入れて佐天の首筋に突き立てた。

数十万ボルトの電流が彼女の体を駆け巡り、黒子が手を離すと同時に、支えをなくして地面に突っ伏してしまう。

マグナはM78星雲の異星人だが、その体は人間である佐天のものを借り受けている身。電流を防ぐことは敵わなかったのだ。

「ちよっ……！ 待ったなしかよ、卑怯だぞッ」

「この状態で意識を保ち、尚且喋ることもできるとは。ずいぶんと頑丈な生き物ですね」

地面に突っ伏して立ち上がることすらできない佐天を見下ろし、黒子は携帯電話を操作しつつ話を続ける。

「宇宙人の罪を裁く法律はありませんし、逮捕するのはやめにしましょう。その代わりに、研究所に送りつけて差し上げますの。学園都市の更なる技術発展の礎におなりなさい」

「研究所だあ？ 人をモノ扱いしやがって、何様のつもりだ、てめえ」

怒りに満ち満ちた表情で自分を睨み付ける佐天に対し、黒子は面倒臭そうに溜め息をついて、右足で佐天の背中を踏みつけた。

「構造がどうなっているかは知りませんが、外見は普通の人間。研究員の方々に待遇について便宜を図っておきますゆえ、安心してお行きなさいな、ウルトラマン」

「この野郎……調子に乗りやがってッ！」

スタンガンの電流程度で指一本動かさないことに、黒子の横暴な態度と、してやったりな笑みに怒りを露わにするマグナ。

黒子は着信の入った携帯電話を耳に当てた。

「もしもし。ああ、固法先輩。今こちらの方で不審者を捕獲しましたの。少々面倒な相手なので、応援を頼みたいのですが」

「 応援！？ それならわたしだって頼みたいわよ！ 今忙しいから後にしてくれる！？ 」

「ど、どうなさいましたの固法先輩。ずいぶんと慌てておられるようです」

「これが慌てずにいられるって言うの！？ 空を見なさい空を」
何をそんなに慌てる必要があると、電話口の言葉に従い空を見上げる黒子。

そこに映ったのは彼女の視界全てを埋め尽くすほどに大きな、冠のように大きな鶏冠トサカを付け、地を駆ける大型の恐竜のように逞しく力強い後ろ脚を持った、空を飛ぶ鶏のような巨大生物であった。

彼女の目に映ったそれは、黒板を爪で引っ掻いたような耳障りな声を上げ、あつと言う間に視界の外へと去って行く。

「な、な、な！ なんですの、なんですのアレはあッ！？」

「前に出てきたでけえハムスターやスケスケの化け物と一緒にだ。いい加減慣れるよ」

「慣れるとか慣れないとか、そういう問題じゃありませんの！ まさかそんな、”防壁”が突破されるだなんて……。信じられませんの」

黒子はそんなことがあるかと頭を抱えて取り乱すが、程無くして我に返りマグナに背を向けた。

「おいおい、まさかお前、あの怪獣に喧嘩売ろうっての？ やめと

「やめとけ。人の力なんかじゃどうにも出来ねえよ。とつと地下街にでも逃げた方が利口だぜ」

「貴女、仮にもウルトラマンなのでしょ？ この状況でよくそんなことが言えますのね」

「ウルトラマンにだって退き時ぐらい分かるさ。ま、お前のビリビリのせいで逃げるに逃げられないがね。早く解除しろってんだよ」

とても ウルトラマン の言葉とは思えない一言に、黒子は心底失望したと蔑みの眼差しでマグナを睨み付けた。

「紅の執行者だのウルトラマンだのと呼ばれていながら、なんという弱腰。嗚呼なんというヘタレぶり。少しでもあなたに期待した自分が馬鹿でしたの。尤も、その状態じゃまともに動けないでしょうけど」

吐き捨てるようにそう言って、空間転移でその場を去った黒子。

あの怪獣と 戦うつもりなのだろう。

勝てる見込みなどないのに馬鹿じゃないのか、とせせら笑うマグナに対し、佐天は深層意識の中から彼に呼び掛けた。

「気持ち分かる。分かるけど……今のはさすがにおかしいよ。勝つか負けるかなんて、やってみるまで分からないじゃない」

「やる前から分かっているさ。奴の名は コウチンガ。ソルジェント星の凶暴な野鳥だよ。本能に忠実な生き物でな、餌食って巣を作って子どもを殖やすことしか考えちゃいねえ。ソルジェント星はこの星の倍ぐらい重力が強かったからなあ、重力の拘束が薄いこの星でなら、マツハ3だか4ぐらいで空を飛び回り、人を喰って喰って喰いまくると思うぜ。とてもじゃないが俺には防ぎきれないし、何よりその速さだ。砲弾や何だじゃ、あいつを捉えきるなんて不可能だぜ不可能」

「だから、やる前から決まってるんか」

「あれ見ても、同じことが言えるか？」

マグナに促され、畳部屋の窓の先から空を仰ぐ佐天。

怪獣・コウチンガが街の中を所狭しと我が物顔で飛び回っている。

嘴の先がほんのりと紅く染まっている。既に何人が補食したのだろうか。あちこちで人々の悲鳴が上がっている。

世界最先端の科学技術に、対外への万全な備えを持つこの学園都市ですら、怪獣一匹に成す術がない。

落ちこぼれの自分が行っても何の意味もない。彼がそう考えるのも仕方なかった。

「あんたの言いたいことは分かったよ。でも……」

だから何だ。自分はウルトラマンになれるんだ。この地球でただ一人、あいつに抗う術を持っているのだ。何もせずただ指をくわえて見てなんかいられない。

佐天はマグナから体の主導権を奪い返し、スタンガンで痺れた体に力を込めた。

「おい、ちよつと待てよ。今の今で動けるわけねえだろうが」

「あたしと一つになってたとしてもウルトラマンであることに違いないでしょう。スタンガンのお仕置き電流ぐらいで何へバってんのよ。痛みは全部あたしの方で引き受ける。後はそっちでなんとかしなさい！」

「なんとかって……。あの黒子って奴のためだろ。あいつにそこまでする必要あるのかよ」

あそこまで貶された相手を助けに行こうだなんてどうかしている。マグナは何故そんなことをするのかと首を傾げた。

佐天はそんなマグナに対し、馬鹿言わないでと言葉を返した。

「あたしだってあいつは嫌いよ。エリートなのを鼻にかけてて、あたしたちみたいな落ちこぼれを馬鹿にしてさ。そのことについては全面的にあんたに同意する。でもさ、そうじゃないでしょ。あんた……っていうかあたしはウルトラマンなのよ。そんなあたしたちの前に怪獣が現れた。防衛隊みたいなのもアテにならない。だったらやることなんて一つしかないじゃん！あの時の約束、忘れたとは言わせないわよ。あたしたちがやらないで、誰があいつを倒せるっ

ていうの！」

『紅の執行者』として活動を続け、自分が最弱のウルトラマンであることを失念しているのか、佐天は怖がる素振りを微塵も見せず、痺れた体に鞭打ってスカートのポケットの中に手を伸ばそうとする。馬鹿な、勝てるはずがない、諦める。変身できたとしてその後はどうする。彼女はどの言葉にも反応しない。

そんな中、彼らの視界の先に何が映った。ビルの上から誰かが落ちて行く様だ。

何かと思い目を凝らす。凝らした先に映ったそれは、赤いリボンで茶の長髪をくくったあの少女。白井黒子がコウチンガの攻撃を食い、瓦礫と共に落下している様だ。

しかも間の悪いことに、落下する黒子に向かって、コウチンガが口を開け、嘴の中にびっしりと生えた鋭い牙で、彼女の柔肌を噛み千切ろうと突っ込んで来ている。あんなものに飲み込まれて無事でいられるはずがない。

マグナは無意識に体を奪い取り、スカートのポケットの中から変身アイテム・マグナコミュニケーションを手に取り、天に掲げた。

白井黒子は目の前に広がる光景に絶望していた。

世界最先端の学園都市がたった一体の怪獣に蹂躪され、成すがままにされている。俄かには信じがたい、信じたくもない光景だった。しかしそう嘆いてばかりもいられない。自分はこの街を護る風紀委員の一員なのだ。黒子は空間転移でまだコウチンガの被害を受けていないビルの屋上へと降り立ち、逃げ遅れてた人がいないかどうか周囲を見回した。

「嗚呼、なんとという、なんと……。お姉様は、お姉様は無事なんでしょうか」

ファミレスの中に待たせた美琴と初春のことを思い出し、黒子は

ファミレスの合った方向に目を向ける。その時だ。

何の前触れもなく足元が崩れ、黒子は空中に放り出された。目の前には大小数多くの瓦礫が降り注ぎ、重力に従って落下している。

それに遅れてつんざくような轟音が彼女の耳を通り過ぎる。例えるなら、F1のレースカーが目の前を通過する際に聞こえるあの音だ（とはいえ、黒子はそれを実際に目にしたことはないのだが）。

この音を聞いて黒子は唐突に理解する。怪獣が自分のすぐ近くを”音速で”通り過ぎたのだと。

そうと分かれば話は早い。黒子は慌てず騒がず辺りを見回し、空間転移後に足場になるような場所を探した。

だがここで予想だにしない事態が起きた。とっくに通り過ぎたと思われていた怪獣・コウチンガが、大口を開け黒子目掛けて飛び込んできていたのだ。空間転移で逃げようにも近づき過ぎている。他に打てる手もない。

黒子は鋭く細かい牙がびっしりと生えたコウチンガの口の中を覗き見た後、全てを諦めたかのように静かに目を閉じた。

しかし黒子がコウチンガの餌にされ、後に産まれるであろう子どもたちの糧へと変えられることはなかった。

コウチンガの背後より突如現れた”青い瞳”のウルトラマンマグナは、馬乗りになってコウチンガが大きく開けた口の中に右手を突っ込み、振り子運動を利用して地面に叩きつけたからだ。

マグナは黒子の体を左手に乗せて飛び、少し離れた場所にゆっくりと地上に降ろす。

あの怪獣に食べられて自分の一生は終わるんだと思っていた黒子は、あまりの事に言葉を上手く継げず、自分を助けた光の巨人を見上げ、ただただ目をぱちくりとさせていた。

「まったく、呑気なもんだよな。人にあんなことしておいてよ」

「呑気、っていうか、驚いて声も出ないって言った方が正しくない？ でもさ、やっぱりあんだ。正義の味方のウルトラマンだよ。今

はつきりと確信が持てた」

「俺がかあ？ どこを見てそう思ったんだよ」

「無理だの無駄だの言ってたくせに、白井さんがピンチになった途端に変身するんだもん。ツンデレってやつ？ もう古いと思うよお、ツンデレ」

佐天の問いにマグナは何も答えない。佐天は凶星なのが恥ずかしいんだと、照れ隠しに押し黙るマグナに微笑みかけた。

もう少しマグナのことをいじってやろうと思ったが、そうは問屋が降ろさない。大仰な地響きを立てて地表に叩きつけられたコウチンガが、生まれたての子馬のように足元をふらつかせながら立ち上がって来ていたのだ。

理由はともあれ、変身してしまった以上この怪獣を仕留めなければ終われない。それがウルトラマンの宿命だからだ。マグナは握り拳を解いて平手を作り、猫背気味の体勢で立ち上がるようになるコウチンガと向かい合った、のだが。

「やべえ、体が……言うことを聞きやしねえ」

「ちよっ！？ いきなりどうしたのよあんだ！」

勇んでコウチンガと対峙したまではよかったのだが、マグナその直後、赤色に激しく点滅するカラータイマーと共に力なく膝をついて倒れ込んでしまう。

佐天はここまで来て物怖じするなと彼を叱咤するが、原因は恐怖とは別のものだった。

「そうじゃない。疲れが溜まってて、思うように体が動かねんだ。思えばこの姿になったのも久々だしよ、こっちの暮らしに慣れて怠けてたのがいけないってえのかよ、おい」

息苦しそうに肩で呼吸をしつつ、この疲労の原因は何だと思案を巡らせるマグナ。

佐天にはその理由がなんとなく分かってきていた。自分の体はマグナとの衝突によって四散したものを、彼に繋ぎ止められ生き長らえている。

言うなれば自分は『佐天涙子という人間の皮を被った』異星人なのだ。

たとえ人の姿を取り、人と同じ大きさで生活しようとも、この星に適應できない”異星人”であることに変わりはない。そこでウルトラマンとしての能力を行使しての自警団行為だ。疲労が溜まらない方がおかしい。

マグナは自分の知らない間に、自分の予想以上の疲労を溜め込んでいたのだ。変身して元の姿に戻った今、無意識に抑え込んでいたそれが一気に噴き出した。そうとしか考えられない。

小さいことにはばかりこだわり、いざという時に役に立てない。しかも原因を作ったのは自分自身。

佐天は心の奥底で自分が今までしてきたことを後悔しつつ、マグナに諦めるな、立てと言葉ばかりの激励を送っていた。それ以外に何も出来なかったのだ。

だが膝をついてばかりもいられない。コウチンガは自分の食事を邪魔したマグナを倒さねばならない外敵と判断。立ち上がると同時に色鮮やかな羽を広げて威嚇すると、マグナが知覚出来ないほどの速さで空を駆け、鋭い嘴と脚の鉤爪で彼の体を切り裂きはじめたのだ。

血の代わりに傷口から光が零れ落ちて行く。動きを読んで捕えようとすると、早すぎる上に疲労がたたってしまい、それも適わない。

活動限界を示すカラータイマーの点滅が激しくなってきた。その様子を遠くから見つめることしかできない黒子は、何も出来ない歯痒さに唇を噛む。

それと同時に、彼女はある疑問を抱いた。

コウチンガはウルトラマンですら追い切れないほどの素早さを持った怪獣だ。ならば何故、先程自分を助けた時はそれを捉えきれたのだろうか。

餌である自分を食べるために夢中になっていたからか？　しかし自分の上に影を落とすほど巨大な相手が襲って来ているのだ、無警戒でいるのはおかしい。となると何故そうしなかったのか。いや、「最初から気付いていなかった」のだろうか。

黒子は何かに気付き目を見開くと、ウルトラマンを襲いその周辺を飛び回るコウチンガに向けて声を張り上げた。

「図体がでかいだけのウコツケイ！　狙うなら私を狙いなさい、さあ、さあさあさあ！」

黒子の叫びにコウチンガはすぐさま反応し、標的をウルトラマンから彼女に向けて飛んできた。

いくらウルトラマンを切り刻んでも、そこから漏れ出すのは光だけ。しかも衰弱していて相手にならない。体力その他の消費を考えれば、妥当な判断と言えるだろう。

瓦礫の上に立つ黒子目掛け、大きく口を開けたコウチンガが突っ込む。しかしその中に彼女はいない。口の中に飲み込まれた瞬間、黒子は手近な足場へと空間転移を行ったのだ。

「どこを狙っていますの？　こっちですよこっち。思ったよりものろまですのねえ」

助かったのにも関わらず、尚もコウチンガを挑発して見せる黒子。飲み込んだと思った餌が自分の目の前にいることに気付いたコウチンガはそちらに向けて嘴を突っ込むが、口の中に入ったのは瓦礫ばかり。

「何やってるのよあの人はあ！　マグナ、早くしないと、白井さんが！」

「いや、ちょっと待て。何か、何かを思い出せそうなんだ。何……だったけなあ」

「何かって何よ。今考えなきゃいけないことなの！？」

コウチンガの視線を自分に釘付けにして逃げ回る黒子の姿を目にし、マグナは何かを思い出そうと頭を抱える。

その何かを思い出せないマグナに対し、黒子から目配せが飛んだ。もしかしてこれは自分のためにやっているのか。ならば何のために。コウチンガの視線を下に向け続けることに何の意味があるというのか。

「そうか、思い出したぞ！　そういうことかッ」

「そういうことって、一体全体どういうことよ」

「まあ、見てな。俺様があの鶏野郎を『一撃』で仕留める所をよ」

「し、仕留めるう!?!」

言うが早いか、マグナは両腕を胸の前で十字に組んでエネルギーを充実させると、その全てを右足の一点に集め、コウチンガ目掛け一目散に駆け出した。

地を強く踏み締め、空高く飛び上がると、右足を伸ばし、重力の勢いを借りて急降下。ウルトラマンマグナはコウチンガの後頭部目掛け強烈な飛び蹴りを見舞った。

右足に収束されたエネルギーが、蹴りと共に青白い火花を生じさせ、クラッカーのような乾いた爆発音を上げて弾け飛ぶ。

マグナ渾身の蹴りを受け、コウチンガの頭は黄色い体液を飛沫させて吹き飛び、その亡骸を街のど真ん中に晒したまま動かなくなつた。

コウチンガの頭の上に載った雄々しき鶏冠。あまりに大きすぎるその鶏冠のせいで、コウチンガは上を向くことができなればかりか、鶏冠が落とす影のせいで、自分の頭上に何があるかすらも知覚できないのだ。

馬鹿馬鹿しい話だが、それも仕方のないことだと言える。

コウチンガは圧倒的な巨体とスピードを誇るソルジェント星の空の王者。同じ星に自分よりも高く飛ぶ生き物が存在しないため、見上げる　行為そのものをする必要がないのだ。

マグナは崩れかけたビルに手をかけてゆっくりと体を起こし、コウチンガの亡骸を見つめて安堵の溜め息を漏らした。

「初めてにしちゃ、結果オーライってやつ？ それなりに上手くやれた、か」

「すごいじゃんあんた。いつの間にあんな技を」

「パンチで出来てキックで出来ない道理はないだろ。そういうことだ」

成る程、それなら納得だと心の中で頷く佐天。そしてそれと同時にウルトラマンマグナは体力を消費し切ってふらつき、地に膝を付くより先に、光の粒子となって虚空へと消えていった。

「あああ、今更痺れが戻ってきてる……。あんなもの用意してくれちゃって、どうしてくれよう」

ウルトラマンから人の姿に戻った佐天涙子は、交差点の往来の中心で突っ伏し立ち上がれないでいた。

気合いやその場の勢いをも使い果たしてしまった今、彼女に残されたのは未だかつてない疲労と、今尚体の中に残留し続けるスタンガンの電流だけだった。

痺れと疲労でその場を一步も動けない佐天の前に白井黒子が現れる。黒子は地に付して立ち上がれない佐天を冷めた目で見下ろし声をかけた。

「ウルトラマン……いや、佐天涙子さん。一つだけ、貴女に聞いておきたいことがありますの」

「聞きたいこと？」

「先程、”弱い人々を護るために戦う”とおっしゃりましたわね。

あの言葉に嘘はありませんの？」

それは紅の執行者としての言葉だったのだが、屁理屈を並べ立ててもしょうがない。佐天は嘘なんてあるものかと威勢よく言葉を返した。

黒子はその言葉に黙って頷くと、佐天に向けて手を伸べた。

「何よ、この手は」

「色々とお疲れでしょう。私の空間転移で手近な病院まで連れて行

つて差し上げますわ。こちらの条件を呑んでいただければ、ですが」
「条件？」

先程の話の続きだというから、てっきり研究所云々のことになるかと思いきや優しげなこの態度。黒子の不可思議な心変わりに佐天は首を傾げて言葉をオウム返しにした。

「今回の件ではつきりと分かりましたの。私たちが持ち得る装備だけではあの怪獣共を駆逐することは到底不可能。認めたくはありませんが、現時点で奴らを倒すことが出来るのは、ウルトラマンである貴女だけ。取引をしましょう、佐天涙子さん。私が風紀委員や警備員のネットワークを駆使して怪獣の出現情報その他を集めて貴女に渡し、貴女はその情報を元にウルトラマンとして怪獣を始末する。貴女にとっても私にとってもいいこと尽くめ、ですよ」

「いいこと尽くめ？ 冗談じゃないわよ。あたしはあたしで戦うの。あんたたちの犬だか懐刀になるなんて御免被るわ」

「分かってませぬのね。貴女だって私たちから見れば、あの怪獣やこの前の宇宙人と同じ”異星の怪物”ですよ。そんな中で貴女の正体が白日の下に晒されたら……どうなるでしょうねえ？」

黒子は佐天を見下しつつ冷やかな薄ら笑いを浮かべた。何が取引だ。これでは一方的な脅迫ではないか。

しかしこれまでの怪獣たちの襲撃により、異星人である自分の立場が危うくなっていることは確かだ。研究所とやらに送られて体を分析されるだけならまだ良い。正体をばらされでもしたら、正義の味方になるどころか、宇宙人であるということだけで、本来守るべき街の人々に糾弾される可能性すらあるのだ。

「私と契約を交わしてくださるのなら、貴女の実在は黙っておいて差し上げますの。うら若き乙女の輝かしき青春の日々、それを監獄の中や他人に後ろ指差されて過ごすだなんて悲しすぎませんか？ 佐天涙子さん」

可愛い顔して言うことが悪質だ。ああ腹が立つ。しかしこれに応

じなければ、白井黒子は間違はなく自分の正体を学園都市中に晒して回るだろう。そうなればこの街にはいられない。それは非常に困る。

佐天は血が出そうなほど唇を強く噛み締め、怒りに満ち満ちた鋭い目付きで黒子を睨みつつ、彼女の差し出した手を力強く握った。

「取引成立、ですね。これからは仲良くいたしましょうね、佐天さん。あつと、そうだ。もう紅の執行者なんて馬鹿な真似はおよしなさいな。あんな蛮勇行為で正体がバレでもしたら、目も当てられませんから」

「ちよつ！ そりやないでしょそりやあ！」

「私たちの仕事は犯罪を犯す能力者の処理。貴女の仕事は私たちでは手に負えない怪獣たちの駆逐。適材適所ですの」

「それじゃああたしたちは誰からも褒められないじゃない！ 酷いよ、こんなのつてないよ！」

「お黙りなさい！ だいたい貴女という人は……」

黒子の背におぶさり、契約の有り様について怒りをぶちまける佐天。

この女は最悪だ。一緒になんていたくない。このまま一人で帰りたい。

しかしそれと同時に、人でありながら、自分と同じように怪獣と戦おうとする黒子の姿が、（言い方は悪いが）一緒に戦ってくれると言った彼女の言葉が、とても頼もしく感じた。

この先どうなるかは佐天にも黒子にも、ましてやマグナにも分からない。

しかし、自分は仲間がいる。もう一人じゃない。そう考えると、何でも乗り越えられそうな気がしたのだ。仲良くなれるかどうかは微妙だが。

第三話・ウルトラマンの流儀（後書き）

次回予告

学園都市に冬が来た！？ 気温は下がるよどこまでも、氷点下1度2度4度8度16度……。発電機は止まるわ、灯油燃料は凍るわで街は大パニック！

怪獣・ダイカンダーを従えたりガアーツ星人に、我らがウルトラマンマグナもまさかまさかの大敗北！

打つ手なしと思われたその時、あの少女が人類の期待を背負って立ち上がった！

次回ウルトラマンマグナ『極寒の寒空の下で』
来週も、みんなで読もう！

前回の予告と本編の内容に、
かなり大きな差異があったことをお詫びいたします。

第四話：極寒の寒空の下で（前書き）

無能力者・「佐天涙子」は、史上最弱のM78星雲人との不慮の事故で命を失う代わりに、超人「ウルトラマンマグナ」へと変身する力を得、彼と同化して一心同体の存在となった。この先どうする？ この先どうなる

・後々冷静にサブタイトルを読み返してみたら、重語どころか白い白馬状態になっていたのに気付きました。もうどうにもなりません。

第四話：極寒の寒空の下で

・超低温生命体・リガアーツ星人 登場
・寒冷獣・ダイカンダー 登場

一日の始まりを告げるように天高く昇る太陽。空を覆う力強い山吹色の輝き。静かに大地を包んでいく朝焼け。今日もまたいつもと何も変わらない一日が始まる。

いや、正確には始まるはず”だった”。天高く昇った太陽が、何の前触れもなく発生した雲の中に隠れてしまうまでは

「ふああああ、つ……、おおつ、寒ッ！ なにこれ、めっちゃ寒い！」

それなりに正確な体内時計に従って目を覚ました佐天^{サテン}ルイ^{ルイ}子は、周囲を包み込む異様な寒さにまどろむことすら忘れ、寝ている間に蹴り飛ばしていた掛け布団に包まった。

芋虫のように布団に包まったまま右手を伸ばし、カーテンを開けて外の様子を覗う。街全体が薄暗い。もしかして起きる時間を間違えたかなと、枕元にあった目覚まし時計を手にとって顔の前に近付ける。時刻は既に朝7時近い。そろそろ朝日が昇ってこなければおかしい時刻だ。

「なんだなんだ芋虫みてーに丸まりやがって。締め付けられる好きなのか？ そういうプレイなのか、アァん？」

「目覚めるなり何言ってるのよあんたは。寒いから包まってるに決まってるでしょ」

「そりゃそうだ……って、なんだこりゃ、寒ッ」

「今頃気付いたの？ っていうかウルトラマンのくせに寒いのがダメなんだね、意外」

「ウルトラマンだって寒いのは苦手だ。恒点観測員に就職して、陽の光が届かない星に配属された先輩が、数か月ともたず転勤願いを出すぐらいにな」

茶化して笑っているものの、マグナの目は本気だ。光の国にもこの国でいう”ブラック”な部署というものがあるのだろうか。掛け布団に包まって縮こまりつつ、佐天は彼の故郷、光の国の社会体系を想像して笑っていた。

とはいえ、このまま潜っただけでもしょうがない。寒いからと言って学校が休みになるわけではないし、そもそも寒すぎて、再び二度寝を決め込もうなどとは思えなかった。

佐天は意を決してベッドの中から抜け出し、クローゼットの中から制服一式を取り出すと再び布団の中に包まり、その中で器用にパジャマだけを脱ぎ捨てて素早くスカートを穿き、その流れでセーラー服を纏い、白いソックスを履いた。

制服のタイがあらぬ方向に曲がっていたり、ソックスが左右で違う色になっているが、体を動かすのも億劫な中で無理矢理着替えたのだから仕方のないことだと言える。

「ああもう、寒い！ 寒くてたまんないってのに、この子は……」

学校指定の膝ぐらいまで伸びた茶色いダッフルコートに袖を通しつつ、佐天は二段ベッドの上の段ですやすやと寝息を立てる初春ワイハルカ飾利ザリの姿を見て溜め息をついた。

佐天と初春は同じ寮のルームメイトだ。普段なら初春が先に目覚め、寝相も寝起きも悪い佐天をあの手この手で起こすのだが、今日に限っては立場が逆転していた。

いつも世話になっているし仕方がないかと、佐天は掛け布団越しに初春の肩を掴むが、気持ち良さそうな顔で寝息を立てるルームメイトの顔を目にし、気が変わった。

「ああもう、何が楽しくてこんな顔して寝てられるんですかねえ。」

あたしなんか寒くて寒くて仕方ないってのにさあ。なんだか腹立ってきた。パジャマの隙間から手エ入れて、膨らみかけの肉まんを揉みくだしてやるうかね」

「やめとけよ。一時のお楽しみでお縄を頂戴して、一生を不意にしてどうすんだ」

「冗談よ冗談。本気でそんなことするわけないでしょ」

口ではそう言いつつも、残念そうな表情を浮かべる佐天。

何故初春はこの寒さの中で平然と寝ていられるのだろう。興味はあったが、窓の外から聞こえてきた尋常ではない地響きがそんな佐天の興味を塗り替えた。

「なんだ、何だッ」

「ちよつと見てよマグナ！ 窓の外、外っ」

部屋の窓の外、学園都市の中心部。巨大なビルが並び立つこの場所に、空から何かが砂埃をもうもつと上げて降ってきた。

「ずいぶんとでけエなありや。飛行機でも落ちたか？」

「そういうのじゃ……ないみたいよ。ほら」

何があったとどうもたえるマグナに、佐天は携帯電話のディスプレイを開いて見せる。

そこに映っていたのは一通のメール。件名はなく、本文には学園都市内と思しき場所の住所と地図の画像が添付されているのみ。そして差出人の名前は「白井黒子^{シライクロコ}」だ。

マグナは全てを悟り、なるほど、そうかと手を叩いた。

「俺たちが出なきゃいけないような事態、ってことね」

「みたいね。あんた、寒いからって逃げないでよ」

「逃げたってあの黒子ちゃん^{クロコ}は、どこまでも追ってくるんだろ？ 無駄だつて分かったりやらないっての」

「なら良し。んじゃ、とつとと行くよ！」

佐天は初春が今も尚すやすやと寝息を立てていることと、周りに誰もいないことを見計らい、スカートのポケットの中から、変身アイテム・マグナコミュニケーションを取り出して天に掲げた。

「黒子ー、差し入れ 持ってきたわよー」

「あああ、ありがとうございますの、お姉様」

「風紀委員も大変ねえ。こんな寒い中……」

「仕方ありませんわ。それが私たちの仕事ですもの」

佐天がウルトラマンに変身する少し前。

白井黒子は、常磐台中学の制服の上に学校指定の厚手のコートシライクロコを

纏い、女子寮前の高台の上で、街の中心を微動だにせずじっと見つめていた。

学園都市に突如起こったこの怪異は、当然のように風紀委員たちの耳に入っており、その上役たち監視の任をに命ぜられていたからだ。

彼女のルームメイトでもある御坂美琴は、黒子に近所のコンビニで買ったピザまんミサカミコトと、自分たちの部屋から持ってきた灰色のスウェットパンツを手渡した。

黒子は買ったばかりながら、既にぬるまり始めたピザまんを美味しそうに頬張りつつ、スウェットパンツを恨めしげに見つめた。

「お心遣い感謝致しますが、さすがにこちらを受け取るわけには行きませんの」

「何ですよ。この寒い中でスカートなんか穿いてちゃ、お腹壊すわよお腹。せめて下に何か」

「お姉様、校則をお忘れではございませんの？ 私たち常盤台中学の生徒は、いかなる場合であつても、外出の際は制服の着用を義務付けられておりますの。それにこんなものをスカートの下に穿くなど……、みつともないにもほどがありますの」

「おカタいわねー。こんな寒い中、しかも早朝よ。見てる人なんていないわよ。格好気にして任務がおろそかになっちゃう方がみつと

もないんじゃないの？」

「うぐぐ……」

悔しそうに唇を噛み、仕方がないとスカートの下にスウェットを穿く黒子。

口ではだらしのないだのみつともないだのと言ってはいたが、寒さに耐えかねていたらしく、その暖かさに少し頬を緩ませていた。

美琴はそんな黒子を見て微笑みつつ、空を覆う不気味な雲を見上げた。

「しっかし何なのかしらね、この不気味な雲。昨日の天気予報じゃ、今日は日本晴れになるって言ったのに」

「昨晚の天気図にこんな雲はありませんでしたし、どこかから流れしてきた形跡もなし。しかも、学園都市上空を覆ったまま動く気配もなし。となると、能力者の仕業……ということになりますか」

「能力者の仕業って……、こんなことが出来る能力者、レベル5だつて利かないでしょ。あたしにだって無理なもの」

「ええ、確かに人間ひとりの所業にしては規模が大きすぎますの。複数人の能力者が共謀しているか、あるいは……」

黒子が人差し指と親指の間に顎を乗せて思案を巡らせ始めたその時。厚い雲を潜り抜け、とてつもなく巨大な黒い影が学園都市目掛け落ちてきた。

黒い影は耳を覆いたくなるほどの轟音を上げて地表に激突し、カバのような顔に象のような胴体、その上にエアコンのような機械を背負ったその姿を彼女の前に現した。

「なっ、何よまた怪獣!？」

「まアこの寒さこの雲、納得の理由ではありませんけれど……」

黒子は仕方がないと溜め息を一つし空間転移テレポートで怪獣の元に向かおうとするが、美琴はそんな黒子の右手を掴んで待ちなさいよと呼び止めた。

「お離してくださいお姉様、私には大事な任務がッ」

「任務だったってどーせあの怪獣と戦うとかそんなもんでしょ？ あ

んた一人で何が出来るっていうの。あたしも混ぜなさい」
「しかし風紀委員には民間人を護るといふ使命が義務がある」
「つべこべ言わないの。ほらほら、とつとと連れていーきーなーさ
ーいー」

危険だの義務だのと口を酸っぱくして言えども、美琴は掴んだ手を離そうとはしない。

美琴の執拗な責めに、とうとう黒子の方が折れた。

「仕方ありませんわね……。少しだけ、どうにもならないと分か
つたらすぐにお逃げくださいませ」

「そうそう。話が分かるじゃないっ」

黒子は頭を抱えて溜め息をつくと、携帯電話でこの場の位置情報を探って地図を見つけ出し、それをメールに添付して何処へと送信した上で怪獣の目の前に飛んだ。

「いやはや、間近で見ると……でっかいわね」

「怖じ気つかれましたの？ お姉様。今ならまだ間に合いますわよ」

「冗談。どーんとやってみるっきゃ……ないでしょ！」

黒子の冷やかしに美琴は厚手の手袋越しに頬を強く叩いて気合いを入れた上で言葉を返す。

美琴は右手の人差し指を運動会の大玉転がし並みに大きな怪獣の目玉に向けて、精神を集中させるべく、肺の中に溜まっていた呼気を思い切り吐き出した。

青白い稲妻がまるで美琴を取り囲むようにして生じ、徐々に彼女の指先に収束されて行く。

稲妻の光に気付いて、怪獣が美琴の方を振り向こうとする刹那、美琴は収束させた電撃を怪獣の左目に目掛け勢いよく放った。

電撃は一直線に目玉に向かって飛び、怪獣は悲鳴らしき雄叫びを上げて苦しがる。

美琴の口から思わず「よし」という言葉が溢れるほど鮮やかな一

発だった。

だがそれも、再び怪獣が動き出すまでの話だ。

目玉を傷付けられて怒りに駆られたカバ頭は美琴たちの立っているビルに顔を向け、じりじりとにじりより始める。

このビルを崩すのではないかと身構える二人の心配をよそに、カバ頭の怪獣は背負ったエアコンのような機械を彼女たちに向けた。

「あれ？ 襲って……こない？」

「い、いいえ、ちち、違いますわわ、お姉様。わたしはもも、もう……」襲われて”いますの”

「何よそのどもりっぷり。人に怖気づくなつて言つてたくせに」

何を馬鹿なと笑つて見せる美琴だったが、直後に自分の周囲が急激に冷えて来ていることに気付く。

先程から寒かったがそれにしても下がり方が異常すぎる。自分で自分の体を抱いて縮こまつても耐えられない。

エアコンから噴き出した見紛うほど強烈な冷気は、瞬く間にビルの周囲を包み、彼女たちの動きを完全に止めた。

美琴たちが寒さに震えて倒れ込んだのを見計らい、のっしのっしと歩を進めるカバ頭。闇雲に攻撃するよりも、相手の機動力を削いでから動く方が効率がよいと考えたのだろう。

ただの怪獣にしては頭腦的すぎる。どういふことだと考えても後の祭り。美琴と黒子は指一本動かせない程に悴^{かじか}み、大口を開け自分たちを飲み込もうとするカバ頭の顔を怯えた目で見つめた。

ちよつと、待ったーッ！

しかし、美琴たちを飲み込もうと大口を開けたカバ頭の口中に収まったのは、人やビルの瓦礫ではなく、横から割り込んできた光の巨人の、堅い硬い右拳であった。

ウルトラマンはそのまま右拳を振り抜き、カバ頭を地面に叩き付けると、ビルの上で寒さに身を震わせる二人の少女を掌で優しく包んだ。

「ウルトラマン……！ 来てくれたのね」

「間一髪。全く、来るのが遅すぎですの」

凍えて意識を失いそうになってなお、生意気に憎まれ口を叩く黒子に「来ただけいいだろ」と目配せをしたマグナは、彼女たちを桃色の 膜 のようなものに包み、屋根の低い建物が建ち並ぶ場所へと移す。

膜の中では温度が一定に保たれており、寒さに体を震わせる心配はない。

二人を安全な場所に遠ざけたマグナは、改めてカバ頭の怪獣の方へと顔を向けた。

「おーおー、厄介なことになってやがる」

「原因は全部あの怪獣……ってわけ？」

「いいや、違うな。こいつは リガアーツ星 の野性動物・ダイカランダ。毛深くて寒さに強いが、自分から周囲を寒くする力はないし、そもそもエアコンなんざ背負っちゃいねえ」

「りが……なんか何が知らないけど、この怪獣じゃないと言うなら、何が原因だっていうのよ」

マグナはカバ頭を上げしげと見た上で、空を覆い尽くす雲へと目を向け、その中心を指差した。

「こいつはただの雲じゃねえ。噴射された冷気が集まって生じた“気流の壁”だ。見える、見えるぞ。あの中に円盤が一機。エアコンを背負ったカバ頭ダイカランダを操っているやつと見たぜ」

「じゃあ、相手は宇宙人？ なんでわざわざ隠れてるのよ」

「リガアーツ星人はとびきり暑さに弱い種族らしいからな。大方、ああでもないかと暑くてたまらねえんだろ」

「なんつう迷惑な宇宙人。こんなところに何しに来たってのよ、もう！」

「んなもの、考えたって分かるもんか。それより、こいつをなんとかしないと」

マグナは視線を再びカバ頭の方に戻すと、直進するカバ頭の前に

立ちはだかり、半開きの^{まぶた}瞼向け、平手を構えてチョップを浴びせた。よろめいて動きの止まった怪獣の頭を両手で掴み、顎目掛けての連続膝蹴り。おどろおどろしい呻き声を上げて倒れ込むその体に、倒壊した雑居ビルを投げつけての追撃。

見かけ倒して大して強くないのだろうか、怪獣・ダイカンダーは、うずくまったままその場で沈黙してしまふ。これにはマグナも拍子抜けだ。

「図体がでかろうが、ただの動物。大したこたあねえな」
「だね。んじゃ、一気に決めちゃいますかっ」

勝利を確信したマグナはその場から動こうとしないダイカンダーにトドメを刺そうと、腕を十字に組んで体内のエネルギーを右拳に集めて、そろり、そろりと近づいて行く。

勝利を確信し油断したからか、彼らは見逃していた。ダイカンダーの背中に取り付けられたエアコンのような機械が、未だに稼働していることを。そして、後ろ足の筋肉が異様な収縮を繰り返していたことを。

些細な見落としは、時に大きな過ちを生んでしまふ。

マグナが拳を振り上げたその瞬間、カバ頭の目に輝きが戻り、後ろ足で地を強く踏み込んで、隙だらけのマグナの体に強烈な体当たりをぶちかました。

マグナは撥ね飛ばされて宙を舞った末に、スクランブル交差点に背中から叩きつけられ、その衝撃で街一帯に震度3の地震が起こり、交差点で信号待ちをしていた数台の車が、砂埃と一緒に空に舞い上がった。

ダイカンダーの猛攻は止まらない。鈍重そうな体躯からは想像もつかないような早さで、起き上がらんとするマグナの体にのし掛かり、前足で彼の腕を何度も何度も踏みつける。

マグナは唯一自由の利く足で、ダイカンダーを蹴りつけ引き剥がそうとするが、その足は調子の悪い自転車のような音を立てるばかり

りで、蹴るどころか曲げることすらままならなかった。

「ちよつとちよつとお！ 何やってんのあんたは！ 苦しくてしゃあないんですけどぉ！」

「寒くて関節が固まっちゃったんだよ、しょうがねえだろ！」

「そんな中年のオジサンみたいな理由！？ 冗談じゃないっての！」

佐天は心の中でマグナを叱り飛ばすが、叫んで怒って足が動くはずもなく。

ウルトラマンの活動限界を示すカラータイマーの発光も虚しく、マグナは再び起き上がれないまま、その場から煙のように消え失せた。

怪獣と唯一渡り合えるウルトラマンマグナが敗れた。街の気温は下がりになり、現在マイナス15度。

目を覚まし、この異常な寒さに気付いた住民たちは、皆一様に暖房を点けて暖を取り始めた。街の電力消費量が一気に高まって行く。マグナによって安全地帯に隔離された美琴と黒子が目覚めて最初に目にしたものは、街の中心部を離れ、郊外へと向かうダイカンダ一の姿だった。

「そんな……！ ウルトラマンが、ウルトラマンが負けただなんて、そんなこと、あるわけない！」

「落ち着いて下さいお姉様。それよりも今はあの怪獣ですの。あの方角に何かがあるか……、お姉様もお分かりでしょう？」

「何がある……って、それは」

怪獣が向かう先に何かがあるか気付き、あつと声を上げる美琴。

この先にあるのは、学園都市ほぼ全域の電力を賄う「発電所」。発電所を破壊され、こんな寒さの中電力の供給がストップしたらどうなるか。分からない二人ではない。

黒子の制止も聞かず、自分たちを護る膜の中から手を出した美琴は、刺すような痛みを感じて出した手を直ぐ様引っ込めた。

「ちよつと、何よこれ……」

「それほどの寒さ、ということなのでしょう。その格好で出歩くのは危険です。お姉様、どうか辛抱くださいませ」

「辛抱しろったって、ここにいっても何の解決にもならないじゃない！ どうしろって言うのよ」

自分の事を氣遣うての言葉だと言うのは分かる。しかし、このやりきれない気持ちはどうすればよいのか。

美琴はその苛立ちを言葉に変えて黒子にぶつけ、黒子もまた、齒痒さに唇を噛んでいた。

「お姉様のおっしゃっていることはよおく存じておりますの。しかしウルトラマンが負けた今、私たちに出来ることは何もありません。他の能力者や、警備員アンチスキルに任せるしか……」

「なんともし……ならないの？」

不安げに漏らした美琴の言葉に、目を伏せ黙って頷く黒子。

ウルトラマンが敗れた今、発電所に向かうあの怪獣を止められる者はもう、誰もいないのだろうか。この街の住民に未来はないのだろうか

「おはようございますー……って、誰もいませんねえー」

街じゅうが異常な寒さにあえぐ最中、初春飾利ワイハルカザリは度重なる轟音の応酬に目を覚まし、何があつたかと呆けた顔で周囲に目をやった。

二段ベッドの下にいないはずの同居人は、みつともなく脱ぎ散らかされたパジャマを残して消えており、この部屋が、いやこの建物全体が妙に暖かい。寝ている間に、何か得体の知れない出来事が起こったのだろうか。初春はカーテンを開けて外の様子を確かめる。

「な、なんですか、これは……」

外を見た初春の目に映つたのは、我が物顔で発電所方面へと進むカバ頭の怪獣と、それに蹂躪されてもうもつと煙を上げる街の様相だった。

情報を集めるべくパソコンの入れるも、暖房に電力を集中させているからか、点けた瞬間にブレーカーが落ち、部屋の電気が全て消えてしまう。

ならばと携帯電話に手を伸ばすも、考えていることは皆同じのようで、回線のパンクによってインターネットも通話も意味を成さなかった。

これはおかしい、絶対におかしい。初春はパジャマを脱いで学校の制服に袖を通してその上にコートを纏い、自分の胸に”手を当てて”部屋を出た。

触れている物体の温度を一定に保つことができる力。それが初春の能力「定温保存^{サーマルハンド}」の特性。外がどんなに寒くても、室内がどんなに暑かろうと、彼女には何の関係もないのだ。

進めども進めども、人の子ひとり見当たらない。道路の所々に亀裂が走っており、車が数台ひっくり返っていて、エンジンとホイールを力なく空回りさせている。

初春の心に不安が募る。こんな時に佐天はどこに行ったのか。自分と同じ風紀委員の黒子は今、どこで何をしているのか。

不吉な考えばかりが脳裏を過ぎる中、初春は「きつと大丈夫」と自分に言い聞かせ、迷いを振り払い、街の中心部へと歩を進めて行った。

ここは……どこだ？ 砂だの埃だので口の周りがじゃりじやりして気持ち悪い。

佐天^{ソデー}のやつは……っと、気持ちよさそーに寝て……寝て？
いや、これは違う。この野郎、寒すぎて起きられねえのか

!?

ダイカンダーに倒され、佐天の姿に戻ったウルトラマンマグナは、

その戦いの中で撒き散らかされた瓦礫の山の上で目を覚ました。

こんなところで寝ていられるか。マグナは佐天の心に呼びかけ、さっさと起きろと促すが、彼女は何の反応も示さない。本来なら自分よりも先に目覚めるはずなのに、これは一体どういうことだ。

いや、意識はある。あるにはあるが朦朧もつろうとしていて、とても起き上がれそうな状態ではない。寒さに体力を奪われたか、それほどの寒さになっていると言っのか。

何にせよ、このままにしておくわけにはいかない。一挙一動が鉛のように重たいが、動かせない程ではない。

怪獣のことなど忘れ、暖かい場所へ逃げようと手を伸ばす。そんなマグナの右手、人差し指の先に何か堅いものが当たった。何だこれはと手を伸ばして握り締め、関節の痛みに耐えながら目の前に引き寄せる。

「なんだと思ったら、こいつかよ……」

それを見て、冗談じゃないぜと溜め息をつくマグナ。それもそのはず。彼が握ったのはカイロや携帯食料などではなく、変身アイテムのマグナコミュニケーションだったのだから。

自分はこの怪獣に負けたのだ。再び戦おうにも宿主の佐天は、寒さに体力を奪われ、意識不明の重体だ。今の自分に何が出来る。尻尾を巻いてどこかに逃げるしかない。

しかし、本当にそれでいいのか。不意打ちと寒さで負けたこの勝負に、佐天涙子は納得できるだろうか。答えは否、間違いない否だ。「……全く、面倒なこと押し付けてくれたよ、このお嬢様はよ」

あんな怪獣に勝てるものか。はっきり言ってこの場から逃げ出したい。だが、自分がやらないでどうする。他に誰がこの街の危機を救えると言っのか。

マグナは諦め混じりに溜め息を吐き、右手を伸ばしてマグナコミュニケーションを天に掲げ、起動ボタンに親指をかけた。

ああーっ！ いたっ、いたいたーっ！ 佐天さーん！

指をかけたまではよかったのだが、そんなマグナの体に抱きつき、しがみつく者が現れた。佐天や黒子たちのことを心配し、街じゅうを捜索していた初春飾利その人だ。

出した手を、かけた指を引っ込めることはできない。抱き付かれた弾みでボタンを押しこんでしまったマグナは、初春と共に眩い光の中に姿を消し、ウルトラマンマグナとして再びダイカンダーの前に立ちはだかった。

「う、う、う……うわあああっ！？ なな、何で？ なんでこんなところにッ」

こうなると驚くのは初春だ。ようやく知人を見つけて安堵したかと思いきや、気がつけば街を蹂躞する怪獣を、はるか見降ろす程の高さに移動していたのだから。

マグナコミュニケーションの光は佐天と初春、二人の少女を取り込んだ。しかし、ウルトラマンになれるのは佐天涙子ただ一人。初春は変身の際にそこから弾かれ、彼の右肩に転送されてしまったと言うわけだ。

何が何だか分からないというろたえる初春を尻目に、マグナはダイカンダーの方へと向き直る。

進行方向に障害物が立ったことで気を昂たかぶらせているのか、鼻息荒く、右前足で地面を何度もならしている。あの強烈な体当たりを、今一度マグナに仕掛けるつもりなのだろう。

マグナを完全に仕留めるべく、ダイカンダーの巨体が跳ねて飛ぶ。避けようにも自分の背後には発電所が立っている。このままの勢いで追突されでもしたら、彼に逃げることは許されない。正面から迎え撃つしか道はない。

力比で勝てないのは重々承知だ。マグナは両腕を十字に組んでエネルギーを充実させると、上半身全てを覆うほど大きな、円形で淡い虹色のバリアを発生させて受け止めた。

「すごい……！ あの怪獣を押し留められるなんて」
ウルトラマンの持つ力を目の当たりにし、呆けた顔で驚嘆の声を上げる初春。だが、防いだからと言って、事態が好転したわけではない。現にダイカンダーは、目の前の障害を突き破るべく体当たりを続けているのだ。

バリアを張って防いだと言っても、この状態では押し寄せる津波の前に、即席の防波堤を立てたのと同じこと。つまりはじり貧だ。こんなことに意味がないことは、マグナにだって分かっている。しかし彼にはそうする以外に何も出来ないのだ。

勝つどころか、このバリアだっていつ破られるか分からない。エネルギーの限界を示すカラータイマーが、激しく赤く点滅を始めた。どこまでもものつびきならないこの状況に、当人よりも先に彼の右肩に乗る初春が声を上げた。

「まずいですよまずいですよ、まずいですよ！ 他に何か、取っておきの技とかはないんですか！？ そうだ、あの……スペルゲン光線とか」

「スペルゲンじゃねえ、”スペシウム”だ」と、マグナは自分の耳元で好き勝手なことを言う初春に突っ込もうとするが、溜まりに溜まった疲労が後を引き、とてもそれどころではなくなっていた。そもそも、再びこうして立ち上がっただけでも奇跡に近いのだ。

（初春には知る由もないのだが）落ちこぼれのウルトラマンに多くを求める時点で間違っている。

初春はそんなことと露知らず悔しさに唇を噛み、独り言に恨み節を込めつつ呟いた。

「ああ、もう！ わたしにもっと凄い能力があれば、あんな怪獣なんて斬り倒して、ビーフシチューのオカズに出来たのに……。ううう」

たとえ能力が成長しようとも、初春の力ではあの怪獣を斬り倒すことは不可能だろう。彼女にだってそれは分かっている。無駄だと

分かっていても、叫ばずにはいられなかったのだ。

しかし、彼女のそんな何気ない一言を聞いたマグナは、何か思うことがあったのか、顔をすくめて思案を巡らせる。

斬る……か。肩に乗ってるこいつのせいでもともに動けねえし、光線が撃てない俺にやあ似合いのやり方だ。

いや、いや。俺は伝説の六兄弟とは違うんだ。そんなもの、出せるはずがねえだろう。

出せる……はずが……。

そこまで考えて、再びダイカンダーの元へと視線を映すマグナ。己の目の前にあるものは何だ。自分の上半身をすっぽりと覆うほどに大きく、怪獣の体当たりを受けても耐え凌ぐ程の耐久性をも備えた、楕円形のバリアではないか。

これならいけるかもしれない。マグナはそう呟いて一人で頷くと、今の今まで盾として使っていたバリアをウルトラ念力で動かし、突っ込んでくるダイカンダーに思い切り叩きつけた。

衝突の勢いも加算されたこともあり、不意を突かれたカバ頭は、額にこぶを作ってその場にうずくまる。

ダイカンダーに対し一矢報いる格好となったが、受け止めたバリアの方もただでは済まず、石膏が砕けるような音を立て、真中に亀裂を走らせた。

「わわわっ、バリアがバリアがッ！ どうするんですか、どうなるんですかあ！」

耳元で慌てふためく初春に辟易しつつも、右手を振り上げ、ダイカンダーに向けて人差し指を突き立てるマグナ。同時にバリアの側方をカバ頭の方に向け、虫が羽ばたくような音を響かせ、それを回転させ始めた。

ダイカンダーはうずくまっただまま動こうとしない。仕掛けるなら今だ。マグナは突き立てた人差し指と共に右手を振り下ろし、丸鋸のように鋭く早く回転するバリアを、カバ頭の眉間目掛けて勢いよ

く放った。

淡い虹色のバリアは無抵抗のダイカンダーを無慈悲に、エアコンに似た機械ごと真つ二つに斬り裂いた上で、リガアーツ星人の円盤があると思しき、不気味な厚い雲の中へと突っ込んで行った。

「これで……とどめだああああッ！」

人差し指を雲に突き立て、万感の思いを込めてマグナは吼える。雲の中へと消えたバリアは、その中で金属同士が擦れ合うような音を発して自由自在に飛び回り、バリアが雲を抜け、再びマグナの手に戻る頃には、円盤は大きな鉄の破片となり街の至る所に降り注いだ。

舞い散る破片の一部から、人の形をした何かが、首を掻きむしって苦しがっているのが見えた。

リガアーツ星人は寒い気候でなければ生きられない宇宙人だ。円盤や雲の障壁から引きずり出されて外気に触れ、気候の変化に耐えきれなかったのだろう。

マグナは彼らに向かってざまあみろと吐き捨てると、疲労で弱った体に鞭を打ち、右肩に乗った初春を地上に降ろし、塵気楼のように静かにその場から消え去った。

カバ頭の怪獣と、空を覆う巨大な雲が消えてから数十分後。円盤が破壊されたことで、街を蹂躪していた寒波は消え去り、陽の光と共に、街中に普段と変わらぬ暖かさが戻って来ていた。

ウルトラマンマグナの活躍で発電所は無事守られ、人の入りの少ない早朝の出来事だったこともあり、各家庭・各施設の電気代が無駄にかさんだことを除けば、重大な被害などなく、事態は徐々に終息へと向かって行った。

「佐天さん、起きて下さい、佐天さんってば」

初春飾利が、瓦礫の中で高いびきを上げる佐天を見つけたのはその頃だ。初春はしゃがみこんで彼女の頭を自分の膝に載せ、大丈夫ですかと体を揺する。

佐天は何度も体を揺すられた末に目を覚まし、気だるそうに体を起こした。

「うう……うん？ おはよー、初春。でもごめん。あと五分……」

「何を言ってるんですか佐天さん。自分が今どこにいるのか知らないんですか？」

「分からないのかって……あれ、ええっ！？ なんで？ なんで！？ なんて外にいるの！？ どうしてよ？ 一体全体どーなっちゃったのよ！？」

目覚めたはいいが、記憶が混線しているらしく、あっけらかんとした言葉を返す佐天。

初春は「こつちが聞きたいくらいです」と溜め息をついて言葉を返した。

「怪獣が外で暴れているのに、わたしよりも先に起きてどこかに行っちゃうから……ずうっと探してたんですよ。本当に何も覚えてないんですか？」

「怪獣……かいじゅう……。あ、ああっ！」

初春の言葉から「怪獣」という単語を聞き取って、今まで自分が何をしてたのかを思い出し、素っ頓狂な声を上げる佐天。初春は「やっぱり何かあったんですね」と、佐天の両肩を掴んで上下に揺する。

「心配で心配で、寒くて携帯も通じない中、ずうっと街を駆けずり回っていたんですよ。一体何をしてたんですか、佐天さん」

「それは、えっと……あのぉ」

”ウルトラマンとして、その怪獣と戦っていた”などと言えるはずもなく、右に左にと忙しく目線を運ばせ、明確な答えを出せないまどもってしまふ佐天。

初春の疑念は膨らむ一方だ。このままではいけない。佐天は、自

分一人で考えてもどうにもならないと悟り、疲れ果て深層意識の中で眠るマグナに呼びかけた。

「ちよつと、ちよつと！　なんとかしてよマグナ！　あんたなんでしょ？　りがなんとか星の怪獣をやっつけたの」

「なんだよ騒々しい。んなもん、バラしちまえばいいじゃねえか。別に減るんじゃないし」

「いいわけないでしょそんなこと！　ああもう、どうしょ、どうしょ、どうしよう……」

「だったらまあ、やることは一つ……だよなあ？」

「何よ、何をしようっての？」

何をするんだと問いかける佐天に対し、言葉ではなく行動で示すと言いたげに、彼女の体に乗っ取るマグナ。

瞳の色が青に変わり、体の主導権がマグナに移ったその瞬間、佐天は初春の手を振り切って立ち上がり、彼女に背を向けた。

「ちよ、ちよつと。どこに行くつもりですか佐天さん。行くなら行くで説明を……」

マグナは周囲をきよるきよると見回し、その中で時計塔を見つけ、大袈裟に声を上げた。

「やっべ！　そろそろ”とつとこほむちゃん”の始まる時間だ！

悪いな初春、この話はまた後、いやまた今度な！　それじゃッ」

「うりはる！？　いや、そんなことよりも、待って……待ってくださいよ佐天さんッ」

見たことも聞いたこともないような番組の名前を口にし、強引にその場から逃げ去るマグナ。

なんですかそれはと佐天を追う初春だったが、そこは人間とウルトラマン。差は埋まるどころかさらに開き、二人の声はビル群を伝って街中にこだまして行った。

一日の始まりを告げるように天高く昇った太陽。空を覆う力強い

山吹色の輝き。
今度こそ、
いつもと何も変わらない一日が始まる

第四話：極寒の寒空の下で（後書き）

次回予告

銀河・連邦裁判機構。

数千もの加盟星を有し、宇宙で起こったあらゆる事件に対し、各星同士の取り決めによって定められた法律で、正当かつ公平な裁きを与えるために存在する、宇宙の一大組織だ。

そんな連邦の検察局から腕利きの検事がやって来た。有罪が確定すれば地球は消滅！ 弁護しようにも宇宙に進出したことのない地球人にはどうすることも出来ない！

本格的すぎる地球の危機に、我らがウルトラマンマグナが立ち上がった！

次回、「宇宙安全保護法・第2290条違反につき」。
来週も、みんなで読もう！

あらすじはあくまでイメージです。本編とは異なる場合があります。

第五話：宇宙安全保護法・第2290条違反につき・前編（前書き）

約7カ月ぶりの更新になりますが、前の話を覚えていなくても大丈夫なはず……です、たぶん。

色々あって前篇と後編に分割してしまいました。

普通の法廷劇のような正確性は恐らくありません。

第五話：宇宙安全保護法・第2290条違反につき・前編

それは、ある日突然訪れた。

星が瞬き雲一つない夜を、その裏側では燦々と晴れ渡る空を、突如数千数万の不気味な円盤が覆い尽くしたのだ。

地球上全ての場所で観測出来たこの怪異を見、人類は映画の撮影か、本当に宇宙人がこの星を侵略しようとしているのかと、多種多様の戸惑いを見せる。

そんな中地球全ての人民に対し、何者がこの星の言葉で呼びかけた。

地球人民全てに告ぐ。君たち地球人は『宇宙安全保護法・第2290条』を破り、月星人たちの尊厳を著しく脅かした。よって、「宇宙最高裁判」によって君たちの罪を裁かせてもらう。

拒否しても構わないが、その場合『宇宙安全保護法第135条』に則って、この星を月星人の植民惑星とさせて頂く。

この星の時間で一日待とう。その間に”弁護士”を用意せよ。法廷の場所は追って沙汰する。

謂れのない告訴に、太陽の光を遮ってずらりと並ぶ、凄まじい数の宇宙船団。全世界をパニックに陥れるには十分すぎるものであった。

しかし、宇宙安全保護法・第2290条とは一体何か。国単位 of 法律の齟齬^{そご}で論争になるようなこの星で、宇宙規模の法律を持ち出されても、誰にも何も分かるはずがない。

世界各国の法律家たちが緊急にサミットを開き、頭を擦り合わせ考えたが、妙案は何も浮かばない。

地球はこのまま、月星人等と言う訳の解らない者たちのものとしてしまおうのか

学園都市のとある学生寮の一室。

佐天涙子サテン ルイコは、風紀委員の仕事をでて行った同居人・初春飾利ウイハル カザリを見送り、自室のベッドで”新聞”に目を通していた。

新聞、と言っても株の為替の動きや今日のテレビ番組の内容が分かるような代物ではない。佐天涙子と一体化した、彼女のもう一人の同居人・ウルトラマンマグナがわざわざ宇宙から取り寄せた、『太陽系惑星新聞』である。

出版社が出版社だけに、いちいち紙媒体で送られてくる事はない。専用のレーザーポインターのような機械に新聞のデータが毎日転送され、それを壁に映して読むと言うものだ。

『何処の星の人でも、手軽かつ簡単に読めるように』がコンセプトのこの新聞は、宇宙各惑星間の自動翻訳機能は勿論のこと、ポインター側の操作で拡大縮小は思いのまま。さらには目の不自由な読者のための音声解説機能まで備え付けられており、利便性の良さから、太陽系周辺銀河で屈指の講読者数を誇っている。

ベッドに寝転がり、天井に映し出された活字を興味深そうに眺めるマグナに対し、彼に体を貸し出している佐天は、つまらなそうな顔で「ねえ」と話し掛ける。

「なんであんな新聞なんか読んでるの。っていうか、あたしには何て書いてあるか解らないし、体も動かさなくて、すっごくヒマなんですよ」

マグナはポインターを操作して天井の活字を消し去ると、胸に手を当てて彼女の問いに答える。「何でっってお前……、この星で暮らす以上、外界の状況は常に把握してないとまずいからだよ。俺は弱し、この星は物騒だからな。この近くで何かが起こった時、対策を

立てられるようにするため、日々の情報収集は欠かせないの」

「ふうん。で、ずいぶんと熱心に読んでるけどさ、何か面白い記事でもあったの？」

「ああ、そうか。お前には読めないんだっただか。ちよっと待ってるよ……」

マグナはベッドから飛び出すと、机の中から虫眼鏡を探し出してレンズ越しに”新聞”の活字を覗く。M78星雲の言葉で書かれていたそれは、佐天に合わせ日本語に翻訳され直していた。

「おわっ、日本語になった！ ええと、どれどれ……」

ポインターの操作をマグナに任せ、上下左右に視線を巡らす。

辺境の惑星・マツハが謎の爆発を遂げ、何十万人もの人民が犠牲になったこと、危険な宇宙怪獣の移動予測や、出会った際の対策。月星人の王妃がお忍びで他の星に旅行している事を取り沙汰するなど、パラッチに近い情報も含まれているが、どれも地球人である佐天の目には留まらなかった。

しかし、社会欄に載った挿絵も何もない小さな記事が、そんな彼女の興味を引いた。読み飛ばして次のページに送ろうとするマグナに静止を掛け、佐天はその記事をまじまじと見つめる。

「マグナ、これって……」

「んん？ ああ、二日三日前に学園都市（こくえんじよし）で打ち上げられたってアレか。扱いが小さいもんで見落としてたな」

それは『地球初の”民間”無人探査ロケット・謎の爆発』と言う見出しの小さな記事。学園都市から発射されたロケットが、着陸寸前で謎の爆発を遂げたと言うものだ。

「どういうことよこれ。昨日のテレビじゃ、ちゃんと月に到達したって言ってたのに」

「捏造したんだろ、学園都市側だよ」マグナは興味なさげに答える。「この星から宇宙に飛び立つにやあ金も時間も相当掛かるからな。

失敗なんかすりゃあスポンサーが資金を提供してくれなくなる。宇宙にや監視の目もないし、誤魔化しておこうって考えたんだろ。ま、

いつまで騙せるかは知らんがな」

「大変なんだねえ、大人の世界も……」佐天はポインターのスイッチを切つて、再びベッドに寝転がる。「ま、あたしたちには関係ない、かあ」

残念ながら、そうは行きませんの。

「えっ、ええっ!?!」

不意に届いた涼やかな声に、佐天は驚いて部屋中を見回す。先程まで腰掛けていた椅子の前に、ジャックシメント風紀委員のシライククロコ白井黒子が、眉間に皺を寄せ、不機嫌そうな顔で立っていた。

マグナは目を白黒とさせ、壁に寄り掛かって騒ぐ。「なな、何だよ急に! 今日日は曜日だぞ! 　かか、勝手に俺の部屋に入ってくるんだよ!」

「貴方の」ではありません。ここは佐天さんの部屋ですの」黒子は彼の台詞に自身の言葉を被せて言う。「そうして呑気であるところを見ると、今起こっている出来事について、貴方は何も知りませんのね。ウルトラマン?」

「何のことだ? 俺たちはさっき起きたばかりで、何もしちゃいねえぞ」

「知らないのなら自分の目で確かめなさいな。ええと、テレビは……」

黒子は机の下からテレビのリモコンを探し出し、今地球上で何が起こっているのかを彼らに見せる。

どのチャンネルを回そうが、「宇宙最高裁判とは何か?」、「我々は一体どうすべきか」などと、政府の高官たちが論議を繰り返す様を目にし、マグナは驚く所か言葉を失ってしまった。

「現在、彼らの要求を甘んじて呑むべきか、艦隊に核兵器を撃ち込むかの二つの意見に分かれ、各国首脳会談で結論を出そうとしている最中ですの。さあ、説明していただけますかしら、ウルトラマン。あの宇宙艦隊は何で、我々地球人は何に巻き込まれたのかを」

「そんなこと、俺が知るもんか。こんな辺境の星で、宇宙最高裁判を敵に回すって相当なことだぜ」

「宇宙最高裁判？」黒子は苛立ちに任せ佐天の胸倉を掴む。^{マグナ}「だから何ですの、その裁判というのは」

「うぐ……ぐ、お前らが知ってるものと大差ねえ、ただの裁判だよ。違つとすりゃあ、惑星単位で起こったいざこざや、他星への侵略行為を取り締まる超法規的な権限を持っていて、どんな罪人が相手でも確保出来るよう、相当数の艦隊を有し、ワープ航行で告訴の出した星まで一瞬でやってくるすごい奴らさ。」

だがま、普通はここよりもっと広い銀河での活動で手一杯だし、宇宙に進出したことの無い地球人じゃあかかわり合いなんて無いがな」

「関わり合いが無いのに、何故この星が告訴を受けているんです。おかしいじゃありませんの」

「んなことは分かってるよ」マグナが言った。「確かなのは、お前から地球人が何者かに冤罪を被らされたつてことだ。宇宙安全保護法・第2290条とは、『ある惑星の居住民が、他の惑星を侵略ないし、そこに住む者たちの生活を脅かした』ことを処罰する法律だ。」

こんな滅茶苦茶な装備で押し掛けて来るつてことは、被害に遭つた星は相当やばいことになっているだろうな。それを地球人のせいだと思つてよ」

「ちよ、ちよつと待つて下さい」黒子が納得出来ないと声を上げる。「被害に遭われた星を哀れだとは思いますが、この星にはこの星の法律がありますの。そんな横暴になど」

「従えるわけがない」と言いかけた黒子に、マグナは無駄だぜと口を挟んだ。

「宇宙最高裁判は銀河系で五十万近い星の承認を得てるんだ。反論したところで知らなかった方が悪いと返されるのがオチだ」

「ではどうしろと言うんですの！？ あなたはウルトラマンだから、私たちを見捨てて逃げれば良いのでしょうか、こちらは星ごと滅

びるかどうかの瀬戸際なんですのよ」

「何イ？ てめえそれ、本気で言ってるのか、ああ！？ なんとか言え、言ってみるよ！」

マグナは取り乱す黒子の襟首を掴んで持ち上げ、左右に揺する。揺すられて落ち着きを取り戻した黒子に、マグナは「落ち着けよ」と声をかけた。

「いいか、俺の中には佐天ソデーがいる、半分は地球人なんだ。ヤバさ具合じゃ大して変わらねえ。それに逃げて済む問題なら、お前らなんか見捨ててとつくに逃げてるっての。大体、誰が逃げるって言ったよ誰が」

「その物言い……、何か秘策でもありますか？」

黒子の襟首から手を離し、面倒臭そうに後頭部を搔いてマグナは言う。「秘策って程のもんじゃないけどよ、勝ち目もなけりゃあ逃げ場もないんなら、やることなんざ一つしかねえだろ」

マグナは窓から空を見上げ、地球を覆う宇宙船団をその目に見据えると、『マグナコミュニケーション』を天に掲げた。

宇宙最高裁判機構の旗艦は、地球の成層圏外から約数千キロ離れた場所で、地球の自転に合わせてゆっくりと動きつつ、政府の回答を今か今かと待っていた。

期限は残り一時間。こんな田舎の星に弁護士などいるわけがない。星選弁護士を用意し、早い所処遇を決めてしまふべきだとの意見が強まる中、旗艦のレーダーは、高速でこちらに向かって来る何かを捉えた。

裁判で解決出来ないから力押しか。どうしようもない野蛮人めと、旗艦を含めて艦隊全ての砲門が開く。しかし、大気圏を越えて飛んできたそれは、地球の重力を振り切った所で止まり、艦隊に「待つてくれ」と叫んだ。

「俺は戦いに来たんじゃない。この星の人間の代理として、本件の弁護を担当しただけだ。撃たないでくれ、頼む」

単体で大気圏を振り切り、頭のとっぺんから足の先まで、全長40メートルはあるつかという巨人が発した、意外な言葉。旗艦の操縦席に座る裁判官は、マグナの姿を見た上でゆっくりと口を開いた。

「君は……M78星雲の。何故貴方のような者がこんな辺境に」

「理由なんかどうだっていいだろう。重要なのは、俺が地球人の代理として、この裁判の弁護を受けるってことだ」

マグナの言葉に、船団内の乗組員は戸惑いを隠せない。そんな中、旗艦に次いで大きな船から巨大な腕が伸び、彼の体を押さえ付けた。「んなつ!? 何しやがるんだ、このツ！」

「この裁判は月星人と地球人との審理だ。部外者の君が介入することとは許されん。とつと立ち去るが良い」

「部外者だあ？」旗艦に人指し指を突き立て、マグナが威勢良く言う。「あんたらにそんな事が言えんのか。話を聞く限り、こいつは地球人と月星人同士の問題だ。なら部外者が弁護をしたって文句は言えねはずだぜ。俺と同じ部外者のあんたらにはな」

マグナの反論に船団内の声が止む。確かに宇宙最高裁判の権威は絶対だ。だか実害が出ているとは言え、満足に弁護士すら立てられない辺境の星を肅清して良いものか。

彼の意見を聞くか否か。答えが出ないまま意見は二つに割れる。

このままでは裁判もままならない。船団内で最も発言力の強い人物が「黙らっしやい」と声を荒げる。

船団内の誰もが口を閉ざしたのを見計らい、その人物がマグナに声を掛けてきた。

「M78星雲の者よ、君の言うことにも一理ある。旗艦へ入りましたまえ、君を本件の弁護士代理として認めようではないか」

裁判の最高責任者の言葉だ。異論があるうと無かるうと、他の者たちは何も言えず押し黙る。だが、この公判における検察官、先程立ち去れと言った男だけは違った。

彼は大層驚いた様子でその人物に問い掛ける。

「裁判長、私はその決定に異義を申し立てます。彼は完全なる部外者だ、本件と関わり合いの無い者を法廷に立たせるなど言語道断！」
「君の言いたいことは分かるが……」裁判長”と呼ばれた旗艦の人物が答える。「彼の言うことは的を射ている。彼に宇宙保護法の知識さえあれば、彼の申し出を断る理由も無い。分かるね？ アトラス検事」

「しかし……！」

「最高責任者は私だ。彼の拘束を解き、弁護席に立たせるのだアトラス検事。繰り返し、これは命令だぞアトラス検事」

「うぬ……ぬ！」

不満はあるが仕方がない。アトラスと呼ばれた人物は、マグナを巨大なマジックハンドから解放すると、大人しく引き下がり、マグナを旗艦へと招き入れる。

佐天はそれを心の中から驚いた様子で見ている。

「すごい、あんた凄いやマグナ。本当になんとかしてくれるなんて……」

「馬ア鹿野郎。こつからが正念場だ、ドジ踏むんじゃあねえぞ、分かったな？」

「ああ……、うん」

法廷に通されたマグナたちは、係官に「審理の手続きをする」と言われ、控室の中で待たされることになった。回転しながら妖しく光る天井のミラーボールに、その光を反射して七色に輝く、鏡のよくな壁。佐天は周囲に視線をさ迷わせ、船団の人々のデザインセンスに辟易とし、大きく溜め息をつきつつ、芋虫のような形のソファの上に腰を下ろした。

「うええ、目がちかちかする……。これが宇宙のお洒落な空間だっ

て言うのオ？」

「ンな訳あるか、わざとやってんだよ。ここは被告人用の控え室。不気味な光と色合いで、罪人の罪の意識を揺り起こすのさ。まあ、気休めにしかならんがな」

「気休めにしかならないんならやめてよもう……ああ、気持ち悪ッ」
「だったら目エ瞑つてりゃあいだろ」マグナは苛立ち混じりにそれよりも話を接ぐ。「やつらの……あの検察官の態度を見たか？ 弁護士なんて最初っから付ける気なかつたって感じだぜ。ハナっから地球人を嵌める気だ」

「いやいやいや……。もしそうだとしたら、まるつきり侵略じゃない。宇宙の法律の元締め気取ってるような奴らがそんなことしたら、相当まずいんじゃないの？」
「しかしそういう風にしか見えないぞ。どんな理由があるかは解らんが……」

弁護の資格も持たず、よくもまあこんな場所に顔が出せるな。恥を知りたまえ、恥を。

一人の男がマグナの話を通り、彼らの間に割って入ってきた。背丈はマグナより少し低いくらいで、端正な顔立ちに、腰まで伸びた艶のある黒髪。糊の効いた黒の上下のスーツなど、殆ど地球人にしか見えない彼の姿に、佐天涙子は大口を開け、目を白黒とさせた。
「ギヌレ又星主席検察官、アトラスです。誠に不本意ながら、この裁判で君たちの相手を勤めさせて頂くこととなりました。どうぞ、宜しく」

マグナは彼の差し出した手を、顔をしかめて握り返す「ご丁寧な自己紹介、どうもありがとよ。仮にも検事だつてのに、法廷に立たせもせず、力づくで門前払いつてのはどういう見なんだ？ ああ」
「地球人の有罪は、裁判の前から確定しているからさ。偶然とは言え、月星人の『王妃様』を手にかけたのだからね。最初に言ってお

こつ。君たちがたとえどんな奇跡を起こそうが、この有罪だけは覆らない。絶対にな」

「そんなの……」「やってみなきゃ分からないでしょうが！」

二人は激情に駆られ、考えなしに言い返してしまふ。根拠も何も無いマグナたちの反論を、アトラスは鼻で笑って「くだらない」と言葉を返す。

「有罪確定の星を弁護するものだから、どんな勇者かと思えば、こんなド素人とは……。時間を無駄にしました。そろそろ開廷です。私が教えて差し上げますよ。宇宙最高裁のいろはをね」

アトラスはマグナの胸のカラータイマーに人差し指で軽く触れ、薄笑いを浮かべたまま踵を返す。

奴のいけすかない後ろ姿を、マグナたちはしかめ面で見送った。

「気に食わないね」

「ああ、気に食わん。黒子ちゃんみてえだ」

「あんたのム力つく基準が何なのか知らないけど……これで、負ける訳にはいかなかったね、マグナ」

「ああ。あんなに馬鹿にされちゃ黙ってなんかいられん。奴らの鼻を明かしてやるうぜ、佐天」

いつになくやる気の乗ったマグナに、満面の笑みで頷く佐天。だが同時に彼女は、聞きそびれた重要な事を思い出した。

「あのさあ、これすごく重要なんで、しっかりと聞いておきたいんだけど……、あんた、裁判の経験って、あるの？」

「心配すんな佐天。シミュレーションなら何度もやったさ、お前ん家の『裁判ゲーム』でな！」

「は……あああッ!? げっ、げげ……ゲームう!? あんた、裁判のことは何でも知ってるんじゃないの!？」

「俺アM78星雲の落ちこぼれ宇宙警備隊員だぞ。知識はあっても法廷に立ったことなんかねえ」

「胸張って言わないでよもう! ああ、あああ……」

実家のお父さん、お母さん。初春に御坂さんに……えっと、白井さん。ごめんなさい、あたし……この星を、救えないかも……。

罪状も、そもそも宇宙の法律など知らぬまま、成り行きで挑まされることとなった、地球人類約六十億人の未来を賭けた宇宙裁判。

行く手には不安と恐怖しかないが、だからと言って逃げ出す訳には行かない。地球人の命運を背負わされた哀れな少女は、虚ろな目で謝罪の言葉を述べながら、蒼い顔をして崩れさった。

第五話：宇宙安全保護法・第2290条違反につき・前編（後書き）

次回予告

いよいよ始まる、ド素人とベテラン検事による地球の命運を賭けた宇宙裁判。

動機に証言、物的証拠が揃い、百パーセント勝ち目のないマグナと佐天は、この窮地をいかにして乗り切るのか？ そして、地球の約六十億人の運命は？

次回ウルトラマンマグナ、『宇宙安全保護法・第2290条違反につき・後編』

来週も、みんなで読もう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6068m/>

とある空想特撮科学シリーズ ウルトラマンマグナ

2011年12月9日01時03分発行